

機動戦士ガンダムこれくしょん X

星龜少将

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この作品は、黒瀬夜明 リベイクさんの作品

【機動戦士ガンダムこれくしょん】

<https://syosetu.org/novel/280636/>

の三次創作作品です。

あくまで、読者の自由な発想のもと書いた作品で、【機動戦士ガンダムこれくしょん】の設定と若干(?)異なる場合があります★(、)

◇ 突如、外宇宙から飛来した謎の存在【こくしよくきどうぐん黒色機動群】の侵略により、人類は中米から南米以外全ての土地を失った。

残された人類は黒色機動群への対抗策として【連合地球軍】を結成。黒色機動群への有効的な反撃が可能な特殊部隊―機動戦士ガンダムシリーズに登場するモビルスーツの魂をその身に宿した少女【モビルスーツ娘 (MS娘)】を主力とした【M.モビルスーツガールズフォースG.F.】が結成された。

そして、連合地球軍と黒色機動群との戦争が始まって…
すでに100年が経っていた…。

だが、その100年の間に…

南アジアにある

エスタルド人民共和国

ガスタール民主共和国

ノーザンベル連合王国

の3国は、黒色機動群から技術提供を受け、独自のMS娘【人工MS娘】を誕生させ、連合地球軍に反旗を翻したのである。

ところが、ノーザンベルは早々に連合地球軍に降伏…。

エスタルドとガスタールは、以前から対立状態にあったため、ガスタールも連合地球軍に降伏し…

ガスタールとノーザンベルは、エスタルドに宣戦布告したのである…。

エスタルド軍の人工MS娘であるシィとティは、ガスタール軍を迎え撃つため、西部戦線に送られた…。

目次

人工MS娘	1
シン・クロサキ兵団	12
追い詰められた2人	23
熾天使の目覚め	32
帰ってきた故郷	41
まっかつか：	49
アミットフォース(前)	56
アミットフォース(後)	62
新たなる戦い	71
月下の攻撃	79
フリーデンの危機	86
サテライトキャノン	93
決着の時(前)	100
決着の時(後)	106

人工MS娘

突如、外宇宙から飛来した謎の存在【こくしよくきどうぐん黒色機動群】の侵略により、人類は中米から南米以外全ての土地を失った。

残された人類は黒色機動群への対抗策として【連合地球軍】を結成。黒色機動群への有効的な反撃が可能な特殊部隊―機動戦士ガンダムシリーズに登場するモビルスーツの魂をその身に宿した少女【モビルスーツ娘（MS娘）】を主力とした【モビルスーツガールズフォースM・G・F】が結成された。

そして、連合地球軍と黒色機動群との戦争が始まって…
すでに100年が経っていた…。

だが、その100年の間に…

南アジアにある

エスタルド人民共和国

ガスタール民主共和国

ノーザンベル連合王国

の3国は

黒色機動群から技術提供を受け、独自のMS娘【人工MS娘】を誕生させ、連合地球軍に反旗を翻したのである―。

ところが

ノーザンベルは、早々に連合地球軍に降伏…。

エスタルドとガスタールは、以前から対立状態にあったため、ガスタールも連合地球軍に降伏し…

ガスタールとノーザンベルは、エスタルドに宣戦布告

したのである…。

◇

午前10時―。

曇天の下…

西部戦線に向かう、人工MS娘10人を乗せたトラックと、人工MS娘の装甲服と、かつての黒色機動群の機動兵器であったZK級を積んだ、4台のトラックが走っていた…。

前線司令部に到着すると、人工MS娘達は、指揮所に着任の申告に行く。

指揮所といっても、簡易な通信機器を備えた掘っ立て小屋だ。

10人も人間が入れるだけの広さは無いため、隊長のみが指揮所に入った。

まもなく、隊長と一緒に、司令官が出てきた。

司令官は、中佐の階級章をつけた、身長は170センチほどの、40代半ばと思われる男性だった。

「よく来た。」

お前達がいないと、戦いにならないからな。

全員、異状が無ければ、すぐに、ここから西に20キロ先にある前線に移動しろ。」

とだけ言つて、司令官は指揮所に戻った。

その言動は、あきらかに、人工MS娘達のことを、たんなる戦争の道具としか見ていないものだった。

「全員、聞いてのとおりだ。」

全員、異状が無ければ、すぐにトラックに乗れ。」

と隊長に言われたので、人工MS娘達は再び、トラックに乗る。

そして、トラックの隊列は、西に向かって走り出した…。

◇

走ること15分―。

トラックの隊列は、前線に到着した。

指揮所に着任の申告に向かう。

前線の指揮所も、やはり、簡易な通信機器を備えた掘っ立て小屋だった。

隊長が指揮所に入って、着任の申告をすると、隊長と一緒に、この前線の指揮官が出てきた。

大尉の階級章をつけた、身長は170センチほどの、30代前半と思われる男性だった。

「よく来てくれた。」

「歓迎する。」

と、敬礼する指揮官。

前線司令部の司令官とは、まったく異なる対応だった。

最前線で戦う者と、後方から命令するだけの者との違いだろう。

「軍曹!!」

と、指揮官は、指揮所の中にいる軍曹を呼んだ。

「ハッ!!」

と出てきた軍曹は、身長が160センチほどの、指揮官よりかは若いと思われる、黒人の男性だった。

「彼女達を兵舎に案内しろ。」

と指揮官から命じられた軍曹は

「ハッ!!」

と敬礼すると、人工MS娘達の方を向き

「これより、お前達を兵舎に案内する。」

「来い!!」

と言って、右方向に歩き出したので、人工MS娘達は、軍曹についていく。

案内されたのは、女性兵士用の兵舎だが、兵舎とは名ばかりの、掘っ立て小屋だった。

「空き部屋ばかりだから、好きな所使っていいよ。」

と、兵舎の管理をしているのであろう、おそらく30代前半と思われる女性兵士から説明を受ける。

人工MS娘達は、2人づつ、兵舎に入っただけ。

◇

兵舎の中は、ワンルームマンションの部屋に相当するほどの広さしかない。

2人でギリギリ…

3人だと、窮屈な小屋だった。

「ようやく実戦だね、シイ。」

と、シイに声をかけるデイ。

「嬉しいの?」

と訊くシイ。

「嬉しいね☆

だいたい、アチキはガスタール人が嫌いなんだ☆

ガスタール人を好き放題殺せるから、アチキはMS娘になったんだ☆」

と言うデイ。

それを聞いて、顔を曇らせるシイ。

「私は…」

戦争を終わらせるためかな…。」

と言うシイに

「モノは言いようだね☆

よくするに、シイもガスタール人を殺したいんじゃないか☆」

と言うデイ。

「別に、そういうわけじゃ…。」

と言うシイに

「戦争を終わらせるんだったら、敵の兵士を殺さなきゃなんない☆

本当はシイだって、ガスタール人を殺したいんでしょ☆」

と言うデイ。

「違う…。」

と、つぶやくシイ。

それつきり、2人の会話は途切れてしまった…。

「じゃ、アチキは寝るわ☆

おやすみな☆

と、デイはベッドに横たわると、ほんの数分で眠りについた…。

シイも、ベッドに横たわると…

ほんの数分で眠りに落ちた…。

シイイラスト：黒瀬夜明 リベイク

と

デイイラスト：黒瀬夜明 リベイク

は、エスタルドの北部出身の少女だ。

ある日、学校からの帰りに…

2人はエスタルド軍の兵士に拉致された。

そのまま、人工MS娘を生み出す施設に送られ…

人工MS娘にされた…。

人工MS娘…。

それは

黒色機動群からもたらされた人体改造技術を利用し、モビルスーツの魂を宿していない人間の少女を、人工的にMS娘にしたものである。

人工MS娘にされた2人の少女は、自分の名前を奪われ

シイ(C)

と

デイ(D)

という名前をあたえられた。

ほんの数週間の訓練ののち…

シイとデイは、他の7人の人工MS娘とともに、ここ西部戦線に送られたのだ…。

◇

翌日…。

雨が降る午前8時22分…。

敵襲を報せるサイレンが鳴り響いたー!!

朝食を食べていたシイとデイだったが、食事をやめて、兵舎を出る。降りしきる雨の中、指揮所前に集合する。

指揮所前には、一般兵の部隊も集結していた。

「ただいま、ガスタール軍の機甲師団および人工MS娘の部隊が侵攻中である!!」

総員、ただちに戦闘配置につけ!!」

と指揮官に命じられ、各部隊は配置につく。

人工MS娘達は、装甲服を積んだトラックに向かう。

ここで、ちよつとした…

いや…

ちよつとどころじゃない問題がおきた…。

人工MS娘達は、周囲を見回す。

「男…いないよね…?」

「うん…いない…。」
と

周囲に男性がいないことを確認していた。

というのも

モビルスーツの魂を宿していない人工MS娘は、装甲服とのシンクロ率を上げるため、装甲服を装着する際は全裸にならなければならないのだ。

これは、通常のMS娘には無い欠点だ。

装甲服を装着するため、全裸になる人工MS娘達。

人工MS娘が装着する装甲服は「機動新世紀ガンダムX」に登場するモビルスーツ【パイロン】だ。

全身が曲面装甲なので、実弾兵器に対する避弾経始にすぐれている…

…という触れ込みだが、実際には、避弾経始など、ほとんど気休め程度である。

また、装甲服の性能も、人工MS娘の能力も、通常のMS娘よりも劣っている。

しかし、ガスタール軍の主力も人工M.S娘であり、装着している装甲服もパイロンなので、通常のM.S娘ほど脅威ではない。

ただし、ガスタールは連合地球軍に下っているため、連合地球軍の武器を使用しているかもしれないし、なにより、M.G.F.が援軍にきているかもしれない。

装甲服を装着しおえた人工M.S娘達は、続いてZ.K級を起動させる。

およそ100年前の旧式兵器であり、現在では、黒色機動群でも使用されていない。

黒色機動群は、旧式兵器であるZ.K級をエステルド、ガスタール、ノーザンベルに供給することで、実質、廃棄処分しているのだ。

この部隊には、2機配備されているのだが：
1番機は起動したが、2番機が動かない。

「動きそうにないか!？」

と訊く隊長に

「まったく動きません!!」

と答える隊員。

「やむをえん!!」

2番機は捨てる!!

出撃だ!!」

という隊長の号令一下、人工M.S娘隊は出撃した。

◇

雨は、ますます激しくなってきた。雷まで鳴り始めた。

そんな豪雨の中、10人の人工M.S娘と1機のZ.K級が進撃していた。

雨が装甲服内に流れ込み、体が濡れて、冷えてくる。

(ううっ…!!)

と、顔をしかめるシィ。

体が冷えて、腹が痛くなってきたのだ。

(い…痛い…)

出るう…!!)

と、激しい便意に、シイは必死に耐えた。
しかし…

『い…いやああ…!!』

『も…もうダメ!!』

ガマンできない!!』

という悲鳴が、通信機から響いた。

どうやら、シイと同じように、体が冷えて腹痛をおこした人工MS娘が排便してしまったのだ。

(わ…私も…!!)

と、シイは声を出さないように耐えながら…

装甲服内に、排泄音を響かせた…。

(お…おえ…。)

と、激しい異臭に、えづくシイ…。

すると…

前方で、爆発がおきた。

敵の砲撃だ。

『散開しろ!!』

と、隊長からの通信が入った。

人工MS娘隊は2人づつ、5つの隊に分かれる。

しかし…

『ギヤアアア…ッ!!』

と、通信機から、砲撃の犠牲になったのだろう、誰かの悲鳴が響いた。

『こちらエフ!!』

イーがやられました!!』

『かまうな!!』

という、エフと隊長のやりとりが聞こえる。

(イー?)

どんな娘だったっけ?)

と考えるシイ。

シイは、イーとは、あまり話をしたことがなかったから、どんな娘

だったのか、わからなかった。

(まあ、いいや…)

もう、会うことはないんだから…)

と、忘れることにした。

まもなく、レーダーが敵の反応を捉えた。

レーダーが捉えた情報は、直接、脳に伝えられる。

『来たぞ、シィ!!』

ガスタール人もだ!!』

と、デイからの通信が入る。

(来た…!!)

と、腹をくくるシィ。

不思議と、排泄物の異臭も、腹の痛みも感じなくなった。

『アチキが仕掛ける!!』

援護を頼む!!』

「わかった!!」

と、シィは停止して、持ってきた重機関銃を地面に据える。

そして、腹ばいになって、重機関銃をかまえる。

(!!)

ロックオンカーソルが、ガスタール軍のパイロン…

人工MS娘を捉えた。

重機関銃の引き金を引くシィ。

重機関銃は、大きな発射音を響かせ、弾丸を発射する。

弾丸を発射するたびに、激しい反動がシィの左肩に伝わる。

重機関銃から飛び出した弾丸は…

ガスタール軍のパイロンの左肩に命中し…

左腕がちぎれ飛び、血が飛び散った。

さらに、頭に命中し…

頭が碎け散った。

血を飛び散らせて頭が碎け散る光景は、さながら、花火を思わせる

ものがあつた。

そして、胸に当たり…

装甲服のジエネレーターを直撃したのか、パイロンは爆発した…。

『やるじゃねえか、シイ!!』

と、デイからの通信が入った。

だが、シイは答えることなく、重機関銃を持って、すぐさまデイを追いかける。

◇そして、再び、重機関銃を地面に据えて、撃つ…。

戦闘開始から、どれくらいの間が経ったのか…？

いつの間にか、雨はあがっており、陽は西に傾き始めていた…。

『エイ隊長は戦死した。』

生きている者はアイのところに来い。』

というアイからの通信が入った。

『行こうぜ、シイ!!』

と、デイからの通信が入った。

戦いは終わったー。

ガスタール軍は撤退した。

勝ったのだ。

しかし…

隊長のエイをはじめ…

ビー

イー

エフ

エイチ

ジエイ

が死んだ…。

ZK級も破壊された。

生き残ったのは

シイ

デイ

ジイ

アイ

の4人だけだった…。

「私達…」

勝ったの…?」

と、^{ヘルメット}頭部装甲をはずして、デイに訊くシイ。

「当たり前ぢやん☆」

と、^{ヘルメット}頭部装甲をはずすデイ。

そして

「ガスタール人を4人殺したぜ☆」

と、笑顔を見せるデイ。

「シイだって、ガスタール人を4人殺したぢやないか☆」

とデイに言われたシイは

「そうだね。」

と微笑んだ。

そう…

勝ったのだ…。

ふと、東の空を見上げれば…

綺麗な虹がかかっていた…。

シン・クロサキ兵团

ガスタール軍の大本営の会議室では、ガスタール軍の将校と、連合地球軍の作戦本部の将校が会談していた。

「我が軍の武器を使用しているにも関わらず、いまだにエステルドを陥落させられないとは、どういうわけかな？」

と、高圧的に訊く、連合地球軍の将校。

「もうしわけございません。」

ノーザンベルが不甲斐無いのと、エステルドの抵抗が思いのほかしつこくて…。」

と、苦しい言い訳をするガスタール軍の将校。

「不甲斐無いのは、お前達も同じだろうツ!!」

と怒鳴る連合地球軍の将校。

「も…もうしわけございません!!」

と、平謝りするガスタール軍の将校。

「あ…あの…」

もうしあげにくいのですが…。」

と、もう一人のガスタール軍の将校が尋ねる。

「何かね？」

と訊く連合地球軍の将校。

「あの…」

できれば…

【M・G・F.】の派遣を…。」

と、おどおどして言うガスタール軍の将校に

「ふざけるなツ!!」

と怒鳴る連合地球軍の将校。

「まあ、まあ…。」

そう言わないでください。」

と、同席している女性・シャギア

が、連合地球軍の将校をなだめる。

「【M・G・F】の派遣…」

よいではないですか☆」

と言うシャギア。

「バカを言うな!!」

こんな戦場に、【M^お・G^前・F^達】の出る幕は無い!!」

と言う連合地球軍の将校。

「いえ。」

こういう戦場だからこそ【M^私・G^達・F^達】が出るべきなのです☆」
と進言するシャギア。

「しかしな…。」

と洩る連合地球軍の将校に

「一週間で、エスタルドを落としてご覧に入れますよ☆」

と微笑むシャギア。

「お…お力添え、ありがとうございます!!」

と、頭を下げるガスタール軍の将校。

「では、早速、準備にかかります☆」

と、連合地球軍の将校に敬礼するシャギア。

「我が軍からも、部隊を派遣します!!」

と、ガスタール軍の将校が進言するが

「結構です。」

私と妹で十分です☆」

と、ガスタール軍の将校の進言を断るシャギア。

「えっ?」

お2人だけで…ですか?」

と驚くガスタール軍の将校に

「ご安心を☆」

私の愛馬は凶暴ですから☆」

と、シャギアは言った―。

会議室を出たシャギアは、妹のオルヴァ

に
テレバシー
念話

を送る―。

へ出撃だ、オルヴァ。》

《待っていたわ、姉さん☆》

〈準備をしておけ。》

《まかせて☆》

◆

シャギアは、M・G・F. の移動基地〔ハルフェース6〕のブリッ
ジに上がってきた。

そして、司令官室に入る。

M・G・F. の司令官は、M・G・F. の創設者にして、初代司令
官だった

シン・クロサキ

の名を引き継いでいる。

現在のM・G・F. の司令官は

第22代シン・クロサキ

連合地球軍少佐で、肥満体の男だ。

しかも

あろうことか、勤務中だというのに、ゲームをして遊んでいる…。

「シン司令。」

と、シャギアが声をかけるが

「うつせえな★」

今、いいところなんだよ★」

と、シャギアを無視するシン。

それでも、シャギアはかまわず口を開く。

「作戦本部より、私とオルヴァに出撃命令が下りました。」

「知ってるよ★」

今、さつき、その命令が来たよ★」

と言って、シャギアの方を向くシン。

「何が出撃命令が下りました…だ★
どうせ、あらかた

お前から話を無茶振りして、無理矢理、作戦本部に命令を出させた
んだろう★」

と言うシン。

それを聞いて、苦笑するシャギア。

この、第22代シン…

勤務中にゲームをするなど、非常識極まりないことをする割には、
なかなか鋭い男であった。

「いいさ★

作戦本部から、命令が出てんだ★」

と言つて、再びゲームを始めたシンに

「ありがとうございます。」

と、敬礼するシャギア。

「すみません。」

もう一つ、聞いていたいただきたいことが…。」

と言うシャギア。

「何だよ!？」

と、ゲーム画面を見ながら言うシン。

「ライフ、ドウエト、ミルラ、bauerに

自由行動の許可をいただきたい

のですが…?」

「自由行動だあ…?」

と、ゲーム画面から目を離さないシンだったが

(…★)

(…)

「テメエ…

頭の切れる女だな…ッ★」

と、シャギアの方を向くシン。

「お褒めにあずかり、恐悦至極☆」

とお辞儀するシャギア。



正式に出撃命令を命じられ、なおかつ部下達の自由行動の許可も得た。シャギアは、居住区に向かう。

シャギアの部下達は、娯楽室にいた。

「作戦本部からの命令を伝える。

私とオルヴァは、エステルド攻略を命じられた。」
と言うシャギア。

「あん？」

隊長と妹だけなの…？」

と言うライフ。

「私達はお留守番？」

と言うドウエト。

「つまらないね…。」

と言うミルラ。

「またしても、死の恐怖はあたえられないのか…。」
と嘆くバウアー。

「そう不貞腐れるな☆

シン司令から、お前達には
自由行動

の許可をもらった☆」

と言うシャギア。

「自由行動…？」

と、顔をしかめるライフ。

「自由行動って…」

何をしてもいいんですか？」

と訊くドウエトに

「そうだ☆」

と答えるシャギア。

「なるほどな…☆」

自由行動か…☆」

と、歡喜に顔を歪ませるミルラ。

「なら…」

死の恐怖をあたえてもらおう☆」

と喜ぶバウアー。

「ということだ☆」

各自、自由に楽しんできてくれ☆」

「了解☆」

と、シャギア達は出撃準備室^ガへと向かった。

◆

出撃準備室^レに来たシャギア達は装甲服装室^{アッセンブルルーム}に入る。

ところで、じつはシャギア達も

人工MS娘

である。

そもそも、モビルスーツの魂を宿した少女など、そうそういるものではない。

そのため、軍の主戦力は人工MS娘となっていた。

エスタルドの人工MS娘と、連合地球軍の人工MS娘の違いは連合地球軍の人工MS娘は、黒色機動群の技術が使われていない点である。

そもそも、MS娘についてのノウハウが豊富な連合地球軍では、人工的にMS娘を誕生させる研究がなされていた。

100年近い研究の末、ついに、通常のMS娘に匹敵するほどの能力を持った人工MS娘を誕生させることができるようになったのだ。

アッセンブルーム
装甲服装着室に入ったシャギア達は、装甲服を装着させるためのアン
ダースーツに着替える。

このアンダースーツは、被弾時の衝撃をやわらげる効果もある。

ここが、装甲服とのシンクロ率を上げるために、全裸にならなけれ
ばならないエスタルドの人工MS娘との大きな違いだー。

「行くぞ!!」

シン・クロサキ兵団、出撃だ!!」

と、装甲服を装着した

シャギア

オルヴァ

ライフ

ドウエト

ミルラ

バウアー

が、発進デツキに出てくる。

【シン・クロサキ兵団】ー。

M・G・Fの創設者にして、初代司令官だった

シン・クロサキ

の名を冠するこの部隊は、M・G・Fのエリート部隊だー。

「シャギア!!」

ガンダムヴァサーゴ、出るぞ!!」

「オルヴァ!!」

ガンダムアシユタロン、出る!!」

「ライフ!!」

コルレル、行くぞ!!」

「ドウエト…」

ブリトヴァ、発進します…。」

「ミルラ!!」

ガブル、発進!!」

「バウアー!!」

ラスヴェート、出ます!!」

と、発進デツキから出撃する、【シン・クロサキ兵団】の人工MS娘達」。

【ハルフェース6】の指令室^{ブリッジ}では、オペレーターがシンに、「シン・クロサキ兵団】全員が出撃したことを告げていた。

「あの…」

作戦本部からの命令では、シャギアとオルヴァの2人だけのはずですが…?」

と訊くオペレーターに

「ああ、そうだよ★」

と答えるシン。

「しかし…」

全員、出撃してますよ…?」

と訊くオペレーターに

「あとの4人には

自由行動の許可を出した

んだよ★」

と言うシン。

「よろしいのですか?」

作戦本部から、何か言われるのでは…?」

と訊くオペレーターに

「よろしいんだよ★」

こっちは命令通り、シャギアとオルヴァに出撃命令を出したんだ★
あとの4人は、勝手にやってるだけで、オレの知ったこっちやねえ
んだよ★」

と、シンは言い放った…。

◇

エスタルド軍の西部戦線基地―。

先日のガスタール軍との戦闘後…

人工^パMS娘^ロが12人…

ZK級が5機…

もちろん、戦車や大砲なども補充されて、先日の戦闘前よりも戦力は増強されていた。

そこに、さらに人工^パMS娘^ロが10人…

そして、ZK級と同じく、100年前の黒色機動群の兵器であったGM級が5機が到着した。

「スゲエな、シイ☆

これだけの戦力があつたら、ガスタール人を殺しまくれるぞ☆」
と喜ぶデイ。

「うん…そうだね…。」

と、相づちをうつシイ―。

その頃、前線指揮所では…

「大尉!!

レーダーに反応!!」

と、レーダーを見ていた軍曹が、指揮官^{大尉}に報せる。

「敵か!？」

「はい!!

数は6…つて…

この識別信号は…!!」

と、驚く軍曹。

「どうした?」

と訊く指揮官^{大尉}に

「敵は連合地球軍のM・G・F…

【シン・クロサキ兵団】です!!」

と叫ぶ軍曹。

「な…何だとおツ!？」

と絶叫する指揮官^{大尉}―。

敵襲を報せるサイレンが鳴り響いた。

「来たぞ☆

ガスタール人どもだ☆」

と喜ぶデイ。

しかし、スピーカーからは

『総員に告ぐ!!』

ただいま、「シン・クロサキ兵团」が接近中である!!

総員、直ちに配置につけ!!』

と、指揮官^{大尉}の絶叫のような命令が流れた。

途端に、基地内は騒然となった。

「マ…マジかよ…!?!」

と、さすがのデイも、相手が「シン・クロサキ兵团」だと聞いて、顔を引きつらせた。

「人工MS娘隊、集合!!」

と、新たに着任した人工MS娘隊の隊長が、装甲服を積んだトラックの駐車場に隊員を招集する。

「総員、出撃準備!!」

と、隊長の号令一下、装甲服を装着するため、服を脱ぎ、全裸になる人工MS娘達。

全員、装甲服を着終わると、隊長を先頭に、パイロン隊は出撃していった―。

荒野を進む、26人の人工MS娘達。

彼女達の後方には、起動に成功した3機のZK級と4機のGM級がついてきている。

やがて…

レーダーが、接近してくる【シン・クロサキ兵团】の機影を捉えた。空に3機…

地上からも3機…。

(来た…!!)

と、緊張するシイ。

(何だろう…)

体が震えてる…?)

と、自分の体が震えてることに気づくシイ。

(バランスナーな調子が悪いのかな…?)

などと考えていたが…

その体の震えは…

恐怖

によるものだということに…

シイは気づいていなかった…。

追い詰められた2人

鬱蒼とした森の中の道を歩く、2人の人工IMS娘―
シイとデイー。

『おい…』

大丈夫か…?』

と、デイーからの通信に

「うん…。」

と答えるシイ。

『このまま、北に行けば…』

家に帰れる…。』

「うん…。」

と、シイとデイーは、北に向かって歩く…。

スラスターの推進剤はすでに無く…

ただ、重いだけの装甲服を着たまま…

シイとデイーは、故郷の村がある、北に向かって歩いた…。

装甲服を脱げば楽になれるが、脱ぐと全裸になってしまう…。

途中、どこかの街か村で、服を強奪しようかと思っただが…

幸か不幸か、2人にその度胸は無かった。

だから、装甲服姿のまま、北に向かって歩き続けた…。

◆ 3日前―。

西部戦線―。

空を飛ぶ

「シヤギエ」
ガンダムヴァサゴ

「オルヴァ」
ガンダムアシユタロン

「パウア」
ラスヴェート

「来たか…☆」

と、地上を見下ろすガンダムヴァアサーゴ。

地上には

26人の人工MS娘

3機のZK級

4機のGM級

が、土煙をあげて向かって来ていた。

「行くぞ、オルヴァア!!」

『了解、姉さん☆』

と、降下していくガンダムヴァアサーゴとガンダムアシユタロン。
ラスヴェートは、GM級に向かっていった。

26人の人工MS娘は、降下してくるガンダムヴァアサーゴとガンダムアシユタロンに向けてマシンガンを乱射するが、ガンダムヴァアサーゴとガンダムアシユタロンには、まったく通じなかった。

地上に降り立ったガンダムヴァアサーゴに、2人のパイロンがマシンガンを乱射するが、当たっても火花が散るだけで、ガンダムヴァアサーゴは傷一つつかない。

「お出迎え、ご苦労☆」

と、ガンダムヴァアサーゴは両腕を伸ばし、手首のストライククロウで2人のパイロンの頭を斬り落とした。

地上に降り立ったガンダムアシユタロンも、バックパックに装備されているアトミックシザーズで、2人のパイロンの頭を握り潰した。

地上を進んできた

コルレル

ブリトヴァ

ガブル

コルレル

コルレルは、1人のパイロンに襲いかかる。
パイロンが乱射するマシンガンをかわしながら、コルレルは素速い

K級の右足を殴った。
ガブル「ミル」に右足を殴られたZK級の右足はへし折れ、ZK級は崩れ落ちた。

崩れ落ちたZK級の頭を、左手で殴るガブル「ミル」。
ガブル「ミル」に頭を殴られたZK級の頭はちぎれ飛んだ。

その要領で、ガブル「ミル」は、残る2体のZK級の足を殴ってへし折り、頭を殴り飛ばした―。

ラスヴェート「バウア」は、上空から4体のGM級を攻撃する。

黒色機動群の兵器であるGM級もZK級同様100年前の旧式兵器で、現在では黒色機動群で使われておらず、人類に供給することで廃棄処分している。

そのGM級の武器は、右手に持つビームスプレーガンで、エスタルド軍で唯一、ビーム兵器を所持している機動兵器だ。

さすがのラスヴェートも、ビーム兵器にはかなわない。

だが、ラスヴェートの高い機動性は、その弱点を補ってあまりある。

「どうした…」

私に死の恐怖をあたえてみよ…ッ!!」

とラスヴェート「バウア」は叫びながら、4体のGM級が地上から乱射するビームスプレーガンを素速い動きで回避する。

そして、右手に持つビームライフルで、GM級を破壊する。

「私に死の恐怖をあたえられないのなら…」

お前達が死ねッ!!」

とラスヴェート「バウア」は、残り3体のGM級も手速く破壊していった―。

ほんの40分ほど…

26人の人工IMS娘は全滅した…。

シャギアのもとに集結する、シン・クロサキ兵団のメンバー達。

『まだ、生命反応がいくつかあるみたいだけど?』

と言うオルヴァに

「放っておけ。」

どうせ助からん。」

と言うシャギア。

「このまま、西部戦線の基地も落とす!!
来い☆」

と、シャギア達【シン・クロサキ兵团】はエステルド軍の西部戦線基地に向かっていったー。

◇

『助かったな…。』

と、デイからの通信に

「うん…。」

と答えるシイ。

シイとデイは、【シン・クロサキ兵团】の圧倒的な強さを目の当たりにし

死んだふり

をして、やり過ごしたのだ。

立ち上がる、シイとデイ…。

『ひでえ…。』

「うん…。」

そこには…

見るも無惨な姿と化した、24人の人工^{仲間}M^間S^達娘の死体が転がっていた…。

「う…うう…。」

と、膝をつき、泣き崩れるシイ。

『ちくしょう…!!』

シン・クロサキ兵团…!!

人殺しのクソツタレどもが…ツ!!』

という、デイの叫びが通信機から聞こえてきた。

『なあ…シイ…』

家に帰らないか?』

という、デイからの通信が入った。

「家に…?」

と、泣きやむシイ。

「ああ。」

と、^{ヘルメット}頭部装甲をはずすデイ。
シイも^{ヘルメット}頭部装甲をはずす。

「脱走罪にならないかな？」

と言うシイに

「きつと、アチキらは死んだことになってるはずだ。」

と言うデイ。

「家に帰るつて…」

ここからだ、とても遠いよ？」

と言うシイ。

「まあな。」

けどよ…

帰る場所があるんだから…。」

と、デイは歩き始めた。

シイも、デイについて行く―。

戦場から早く離脱するため、スラストを噴かした。

それで、推進剤を使い切ってしまった。

あとは、エスタルド北部の故郷まで、徒歩で移動する…。

そして…

3日が過ぎた…。

◇

3日の間に…

情勢は一変した。

西部戦線の壊滅により、ガスタール軍が進撃。

さらに東部戦線も、連合地球軍の支援を受けたノーザンベル軍が突
破。

連合地球軍、ガスタール、ノーザンベルの三軍は、一気にエスタル
ドの首都エルデンに進行…。

本日午前零時、エスタルドは降伏した…。

これらの情報は、装甲服の通信機によって知ることができた。
戦争は終わったのだ。

「やったな☆」

これでもう、アチキらは平和に暮らせる☆」

と、笑うデイ。

「うん!!」

と、シイも喜ぶ。

「さあ、もうひと踏ん張りだ☆」

と、シイとデイは、故郷に向かって歩き始めた―。

途中、廃工場を見つけた。

「何だ、ここ?」

「何かの工場みたいだね…。」

と、デイを先頭に正門を通る。

デイが建屋の扉を蹴破り、建屋内に入る。

建屋内には、機械類は何も無かった。

閉鎖されてから、相当月日が経っているようだ。

「ここだったら、安心して脱げるな。」

と、装甲服を脱ぐデイ。

たしかに、こんな場所に人が来るとは思えない。

シイも装甲服を脱いだ。

全裸のデイが、残っているロッカーを開けていく。

「何してるの?」

と訊くシイ。

「服探してんだよ。」

作業服の1つや2つ、あるんじゃないかと思ってな…。」

と言うデイ。

たしかに、いつまでも装甲服を着ているわけにもいかない。

シイも、作業服を探すことにした。

2人が入った建屋には無かったので、隣の建屋に移動する。
全裸の少女2人が、着る服を探して廃工場をうろつくという、なんともシュールな光景だった…。

建屋の中で作業服を探していたデイが外を見ると…

「M・G・F.だ…!!」

と叫んだ。

そのまま隠れるシイとデイ…。

◆

パトロール中のM・G・F.のドートレス・フライヤー2名が、廃工場を発見した。

そして、建屋の中で、シイとデイが脱ぎ捨てた、パイロンの装甲服を発見した。

「こちら、P-01。

ポイントK-357にて、遺棄されたエスタルド軍の人工MS娘の装甲服を発見。

回収します。」

2人のドートレス・フライヤーは、シイとデイが脱ぎ捨てた装甲服を持って、再び空に飛びたった―。

「やべえ…。」

「ど…どうしよう…。」

と、顔面蒼白になるデイとシイ。

最初に入った建屋に行ってみたが、装甲服は全て持ち去られていた。

シイとデイは、文字通り、丸裸だ…。

もはや、こんな姿では、外を歩くこともできない。

M・G・F.の捜索隊が来るのも、時間の問題だろう。

「ど…どうしよう…。」

と、怯えるシイ。

「ちくしょう!!」

捕まっただまるか…!!」

と、再び、隣の建屋に走るデイ。

「ど…どうするの!?!」

と、シイはデイに訊くが、デイは何も答えなかった。

デイも、もはや、どうすればいいのか、わかっていなかった…。

ただ、捕まりたくない…

そんな思っただけで、無意味で無駄な抵抗を試みているだけだった…。

(ちくしょう…ちくしょう…!!)

隣の建屋に入り、建屋内を見回す。

建屋の奥に、扉があった。

そこに向かって走るデイとシイ。

扉にたどり着き、デイがドアノブを回して引くと…

「開いたぞ…☆」

扉を開けて、部屋の中に入ると―

「何だ…これ…!?!」

部屋の中には…

思いがけない物

があったのだ…。

熾天使の目覚め

M・G・Fの輸送機【ハルフエース6】に運ばれた、廃工場でシイとデイが脱ぎ捨てたパイロンの装甲服は、解析班によつて調査された。

その結果、ボイスレコーダーに残された会話の記録から、シイとデイがエスタルド北部にある村に向かっていたことがわかった―。

【ハルフエース6】の指令室では、シャギアがシンに謝罪していた。「もうしわけございません。」

戦場において、敵の生体反応を確認しておきながら見逃した、私の失態です。」

「ああ、そうだな…★

お前めえ…

時折、そういうポカ失やらかすよな?」
と言いつつシン。

「それにしても、その廃工場に装甲服が脱ぎ捨てられていた…つくことは、その装甲服の持ち主は、今は全裸マッパつてわけだ☆」

と、薄ら笑いを浮かべるシン。

「まともな女なら、外を出歩くことはないでしょう☆」

と言いつつシャギア。

「つきましては、その廃工場の搜索を、私にやらせてください。」
と、シャギアは願い出たが

「ダメだ★」

と、却下するシン。

「なぜです?」

と訊くシャギアに

「そんなチンケな任務で、お前めえの失態の帳消しになるか★」
と言いつつシン。

そして、シンは内線でサナ

を呼び出す。

『お呼びでしょうか、司令?』

「おうよ★

お前^めえは1個小隊を率いて、ポイントK—357に向かえ。」

と、サナに命じるシン。

『偵察隊がパイロンの装甲服を発見した廃工場ですね?』

と訊くサナに

「そうだ★

パイロンの装甲服の持ち主は全裸^{マッパ}だから、外に出歩いたりしてないはずだ★」

と言うシン。

『拘束すればいいのですか?』

と訊くサナに

「オレは、ガキの全裸^{マッパ}に興味無えよ★

つくかよ…

エスタルド軍の人工MS娘部隊は全滅

してるんだよ…:★」

と言うシン。

それを聞いたサナは

『了解☆』

と、通信を切り、ほくそ笑む…。

「ということだ★

コイツは、ちよつとした、お前^めえへの懲罰だ★」

と、シャギアに言うシン。

「寛大な処置に感謝いたします。」

と、敬礼するシャギア。

指令室を出たシャギアは、事の顛末を、オルヴァに念話^{テレパシー}で伝える。
《どうだったの、姉さん?》

〈謹慎だ★〉

《そうなんだ…》

〈すまん。〉

お前の忠告を無視した罰だ。》

《違いわ。》

確実に敵を殺しきれなかった、私達全員の責任よ。〉

〈フツ…☆〉

ありがとう、オルヴァ…☆》

◆

一方、シンからシイトとデイが隠れている廃工場の搜索を命じられたサナは、意気揚々と出撃準備を進めていた。

ドートレスコマンドの装甲服を装着し、背中にフライヤーユニットを装備する。

サナに同行する4人の隊員は、ドートレスの装甲服を装着し、背中にフライヤーユニットを装備する。

「これより、ポイントK―357に逃げ込んだ、エステルド軍の人工MS娘部隊の残党を掃討する!!」

と、隊員達に命じるサナ。

そして、発進デツキから出撃するのだった―。

◇

シイトとデイが、廃工場内で見つけた物…。

それは―!?

「これ…」

ガンダムタイプの装甲服

だよな…?」

と言うデイ。

「うん…。」

でも…

見たことのないタイプだね?」

と言うシイト。

シイとデイが見つけた、ガンダムタイプの装甲服：
それは、白と水色とエメラルドグリーンで塗り分けられた：
ウイングガンダムゼロ（EW）に似た装甲服だった…。

「使えるのか？」

と訊くデイに

「わからない…。」

と答えるシイ。

「とりあえず、着てみる？」

と言うシイ。

「いや…着るって言ったって…」

ガンダムタイプは、マジのMS娘じゃないとダメだろ？」

と言うデイ。

「でも、もうすぐ、M・G・F. が来るんでしょ？」

だったら、こんな格好で捕まりたくないな…。」

と言うシイ。

「たしかにな…★」

と、同意するデイ。

「…って、ちよつと待て★」

お前がそれ着たら、アチキはどうなる!？」

と、シイにツツコムデイ。

ここには、装甲服が一着しかない…。

つまり、シイがこのガンダムタイプの装甲服を着てしまうと、結局、

デイは全裸のままである…。

しかし、デイの思いなど気にもとめず、シイはガンダムタイプの装
甲服を装着した。

すると…

胸部中央にあるランプが光りだした。

「デイ…」

これ…

動く…!!」

と、ガンダムタイプの装甲服が起動したことに驚くシイ。

「マヂか…!?!」

と、デイも驚く。

「この装甲服の情報が…」

頭の中に流れてくる…!!」

と言うシイ。

「ど…どんな装甲服なんだ?」

と訊くデイ。

「連合地球軍…」

量産試作型装甲服…

ウイングガンダムセラフイム…?」

と言うシイ。

「ウイングガンダムセラフイム…!?!」

それが、その装甲服の名前なのか!?!」

と訊くデイに

「うん…。」

そうみたい…。」

と答えるシイ。

「つくか、今さつき

連合地球軍の装甲服

って言ったよな?」

と訊くデイに

「うん…。」

そうみたい…。」

と答えるシイ。

「つまり、M・G・F. の物ってことだろ?

マズいんじゃないかねえのか…?」

と言うデイ。

「そ…そうだよね…。」

と言うシイ。

その時―!!

「来た…!!」

と、ウイングガンダムセラフイムのレーダーが、ここに接近してくる機影を捉えた。

「M・G・Fか…!?!」

と訊くデイに、うなずくシイ。

「私…」

戦う…!!」

と、戦う決意をするシイ。

「ああ…!!」

行け、シイ…!!

M・G・Fに、エスタルドの民の誇りを見せてやれ!!」

とシイを激励するデイ。

「うん…!!」

と、シイは建屋から出る―。

外に出たウイングガンダムセラフイムは、空を見上げる。

彼方に、5つの小さな黒点が見える。

来るのは、M・G・Fのドートレス・フライヤー5名。

ウイングガンダムセラフイムは、少し腰を落とす―

「シイ!!」

ウイングガンダムセラフイム!!

行きます!!」

―と叫んで、背中の翼を広げて、空に飛び上がった―!!

◆ 廃工場に向かって飛ぶ、サナ率いるドートレス・フライヤー隊。

まもなく、サナのドートレスコマンド・フライヤーのレーダーが、前方から飛んでくる機影を捉えた。

「何だ?」

ウイングガンダムセラフイム…?

識別コードは味方機だが…?」

と、困惑するサナ。

だが：

ウイングガンダムセラフィムが撃ってきた!!

ウイングガンダムセラフィムの攻撃は、左端を飛んでいたドートレス^{「マッ」}・フライヤーを直撃。

ドートレス^{「マッ」}・フライヤーの上半身が消滅し、下半身が落ちていく…。

「メリィィィ…ッ!!」

と叫ぶサナ。

そして

「総員、^{味方識別装置}IFFを解除しろッ!!

あれは敵だッ!!」

と叫ぶ。

識別コードが味方機だったため、^{味方識別装置}IFFも味方と判定したので、サナ達はウイングガンダムセラフィムを攻撃することができなかったのだ。

サナ達は、マシンガンを乱射しながら、ウイングガンダムセラフィムに立ち向かう。

◇

空に飛び上がったウイングガンダムセラフィムだったが、^{味方識別装置}IFFがドートレス・フライヤーを味方と判定していたため、攻撃することができなかった。

シィは、すぐに^{味方識別装置}IFFを解除すると、右手に持つバスターライフルの照準を右端のドートレス^{「マッ」}・フライヤーに合わせた。

「そこっ!!」

と、バスターライフルを撃つシィ。

バスターライフルの銃口から放たれた黄色いビーム弾が、ドートレス^{「マッ」}・フライヤーを直撃。

ドートレス^{「マッ」}・フライヤーの上半身が消滅し、下半身が落ちていった。

(!!)

残った4人のドートレス・フライヤーが、マシンガンで乱射しながら迫ってくる。

「なんの!!」

と、バスターライフルを撃つシイ。

ドートレス・フライヤーは、左手に持つシールドで防ごうとしたが…

バスターライフルの威力を防ぐことはできなかった。

バスターライフルの銃口から放たれた黄色いビーム弾が、ドートレス・フライヤーのシールドを直撃。

シールドを破壊するどころか、ドートレス・フライヤーの左腕そのものが消し飛んだ。

左腕を失ったドートレス・フライヤーは、血をまき散らしながら落ちていった…。

(えいっ!!)

と、バスターライフルを撃つシイ。

バスターライフルの銃口から放たれた黄色いビーム弾が、ドートレス・フライヤーの腹部を直撃。

胸から下が消し飛び、残った上半身も爆発四散した。

(やあっ!!)

と、バスターライフルを撃つシイ。

バスターライフルの銃口から放たれた黄色いビーム弾が、ドートレス・フライヤーを両足を直撃。

両足が消し飛んだドートレス・フライヤーは、血を飛び散らせて落ちていった…。



(な…何だ…?)

何なんだ、アイツは…!?)

と、部下が次々と殺されていくのを見たサナは、恐怖のあまり、逃走をはかった。

しかし…

後方からの、高熱源体接近を報せる警報を聞き、振り返ると…

「う…

わああああ…ツ!!」

バスターライフルの銃口から放たれた黄色いビーム弾が、逃げるドートレスコマンド・フライヤーの上半身を直撃。

上半身が消し飛んだドートレスコマンド・フライヤーの下半身が落ちていった…。

◇

「シィ☆」

と、廃工場に戻ってきたウイングガンダムセラフィムを迎える
デイ。

「やったよ、デイ…

…つて、デイ…

その姿は？」

と、デイに訊くシィ。

「へッへエ☆

ロッカーの中から、作業服を見つけたんだ☆」

と自慢するデイ。

サイズが合っていないのでブカブカだが、全裸よりかは、はるかにマシだ。

「で、これからどうする？」

と訊くシィ。

「決まってるじゃん☆

アチキをかかえて空飛んで、家に帰ろうぜ☆」

と言うデイ。

徒歩だと途方もない時間がかかるが、空を飛べは、あつという間だろう。

「じゃ、しっかりつかまってよ。」

と、デイをかかえるウイングガンダムセラフィム。

「そういうシィも、アチキを落とすなよ★」

と、ウイングガンダムセラフィムにしっかりとつかまるデイ。

デイをしっかりとかかえ、ウイングガンダムセラフィムは故郷に向かって、空に飛び立った。

帰ってきた故郷

ハルフェース6に、左腕を失ったドートレス・フライヤーが帰ってきた。

しかし、帰還した直後に、装着者は出血多量で死亡した…。

ハルフェース6のブリッツでは、死亡したM・G・F。隊員のドートレス・フライヤーの戦闘記録コンバットレポートの解析が行われた。

「何かわかったか?」

と、オペレーターに訊くシン。

「はい。」

こちらをご覧ください。」

と、オペレーターはモニターに、ある映像を映す。

それは、シイのウイングガンダムセラフイムによって、サナ隊が全滅させられる映像だった。

「おいおい…」

ありや、ウイングガンダムセラフイムじゃねえか★

と、映像を観たシンがつぶやく。

「何ですか?」

その…

ウイングガンダムセラフイムって…?」

と訊くオペレーターに

「今から半世紀くらい前なんだがな…」

MS娘じゃない一般兵士でも使える装甲服を開発しようとしたことがあつてよ…。

ま、失敗したんだけどな★

と言うシン。

「その装甲服が、なぜ、エステルドに?」

と訊くオペレーターに

「さあな★

それよりも、問題なのは、ウイングガンダムセラフイムを使っているのは誰なのかってこった★

お前、誰だと思う？」

と、ほくそ笑みながら言うシン。

「わかりません…。」

と答えたオペレーターの頭を

「エスタルドの脱走兵に決まってるだろ★」

と、軽く叩くシン。

そして、シンは艦長席に戻ると、内線でドウエトを呼び出した。

《お呼びですか？》

と訊いてくるドウエトに

「お前、1個小隊率いて、ポイントL567に向かえ。」と命じるシン。

《場所を確認しましたが…

ここは集落ですが？》

と訊いてくるドウエトに

「そうだ。

そこに、エスタルド軍の脱走兵が逃げこんだ。

そいつをしょっぴいてこい。」

と言うシン。

《斬り刻んだり

《まっかつかにしちやだめですか？》

と訊いてくるドウエトに

「そうだな…☆

モノフィラメントワイヤーカッターが突然誤作動する…

…なんて事故が起きたら、仕方ねえなあ…☆

と笑うシン。

《わかった☆

1個小隊率いて、ポイントL567に向かいます☆》

と、ドウエトは嬉しそうに言って、内線を切った。

「まったく…☆

どうしようもねえガキだな…★

と、悪態をつくシン。

「よろしいのですか?」

と訊いてくるオペレーターに

「よろしいんだよ☆

モノフィラメントワイヤーカッターが突然誤作動した

んだからな☆」

と、シンは笑った…。



「まっかつか☆

まっかつか☆」

と薄ら笑いを浮かべながら、ドウエトは出撃準備を進めていた。

ブリトヴァの装甲服を装着し、サブフライトシステム・ベースジャバーに乗る。

サナに同行する4人の隊員は、ドートレスの装甲服を装着し、背中にフライヤーユニットを装備する。

「これより、ポイントL567に逃げ込んだ、エステルド軍の脱走兵の逮捕に向かいます!!」

と、隊員達に命じるドウエト。

そして、ブリトヴァ「ドウエト」が乗っているベースジャバーが発進デツキのカタパルトに設置される。

〈進路、クリア!!

ブリトヴァ、発進どうぞ!!〉

と、オペレーターからの通信が入る。

「了解!!」

システム、オールグリーン!!

ドウエト!!

ブリトヴァ、出ます!!」

と申告した後―

ブリトヴァ「ドウエト」が乗るベースジャバーが、発進デツキのカタパルトから射出された。

その後、15秒間隔で、4人のドートレス・フライヤーが発進した。そして、ブリトヴァ「ドウェット」が乗っているベースジャバーを先頭に、ポイントL567に向かうのだった。

◇
デイを抱えて空を飛ぶウイングガンダムセラフイムの眼下に、故郷の村が見えてきた。

「シイ、着いたぞ☆」
「うん☆」

と喜ぶデイとシイ。

数ヶ月前、エスタルド軍に拉致され、人工MS娘に改造された際、記憶もいくつか改竄されたが、故郷の村のことは、記憶から消えていなかった。

「パパ…」

ママ…!!」

とウイングガンダムセラフイムは、はやる気持ちを抑えきれず、村の中心地に向かって降下していった。

「コラッ!!」

シイツ!!

スピード出し過ぎだあッ!!」

と、デイが頭にかぶっていた作業帽が舞い上がった…。

◇
村の中心地にある市場―。

「ああん?」

と、八百屋の親父がふと、空を見上げると…

黒い影が降下してくるのが見えた。

「な…何だ、ありや!」

その影は、鳥よりも大きいのが、飛行機ほど大きくない…。
やがて…

黒い影が地上に降り立った…。

地上に降り立ったのは、デイを抱えたウイングガンダムセラフイム

だった。

だが…

ウイングガンダムセラフイムの姿を見た、八百屋の親父が

「モ…」

M S娘だあああ…ツ!!」

と叫ぶや

「M・G・F．だあーっ!!」

「逃げろおーっ!!」

「助けてくれえーっ!!」

と、市場にいた者達は一斉に逃げ出した。

「ま…待ってください!!」

私はM・G・F．じゃありません!!」

と、^{ヘルメット}頭部装甲をはずすウイングガンダムセラフイム。

「えっ?」

お前さん…

もしかして…

クレアちゃん

か…?」

と言う、シイの顔を見た、腰を抜かしている八百屋の親父。

「えっ?」

クレア?

それが、私の名前なんですか?」

と訊くシイ。

エスタルド軍に拉致され、人工MS娘の改造時に記憶を改竄された際、自身の本名の記憶が消されているのだ。

だから、シイは自分の本名を知らないのだ。

「何言ってるんだい?」

自分の名前を忘れちゃったのかい?

あんた、ロイドさん家の娘のクレアちゃんじゃないか。

そして、一緒にいるのは、友達の

デИАアナちゃん
じゃないか。」

と言う八百屋の親父。

「デИАアナ？」

それが、アチキの名前なのか…？」

と首を傾げるデイ。

デイも、自分の本名の記憶を消されているのだ。

「何でえ…？」

どうやら、ワケありみたいだな…。

とりあえず、一緒に村長さんのところに行こう。

そこで、落ち着いて話そう。」

と言って立ち上がる八百屋の親父。

そして、八百屋の親父と一緒に、シイとデイは村長の家へと向かった。」。

◇

八百屋の親父と一緒に村長の家に来たシイとデイ。

その後、村長がシイとデイの両親を呼んだ。」。

「クレア!!」

「クレア!!」

「パパ!!」

「ママ!!」

と、数ヶ月ぶりに再会する、シイとシイの両親。

「デИАアナ!!」

「デИАアナ!!」

「パパ!!」

「ママ!!」

と、デイも数ヶ月ぶりに両親と再会した。

そして、村長をまじえて、シイとデイは、これまでの経緯を知る限り話した。

「なんということじゃ…!!」

このような、まだ年端もいかぬ乙女に、そんなことを…!!」
と、エステルド軍の行いに憤る村長。

「しかし、幸い…と言っていいのか…」

クレアの話だと、軍のMS娘は全滅しているようなので、クレアも
ディアナちゃんも死んだことになっていると思います。

軍から追及されることも無いでしょう。」

と言うのは、シイの父親のロイド。

「オレは、軍のやったことは許せんが…」

かと言って、真実を晒すと、それはそれで厄介だ…。

ディアナを無茶苦茶にされて泣き寝入りするみたいだが…
触らぬ神に祟りなしだな…。」

と言うのは、デイの父親のゲオルグ。

「思うところはあるかもしれんが…」

しかし、世の中、見て見ぬ振りをした方が良い場合もある。

とにかく、ロイドとゲオルグの娘が無事に帰ってきたんだ。

それでよからう。」

と村長が言うと、ロイドもゲオルグも頷いた。

シイの母親は素直に受け入れたが、デイの母親は納得がいかず、不
満げな顔をしていたが、当然であろう。

その時だった。

村人の1人が、村長の家に駆け込んで来た。

「そ…村長さんッ!!」

た…大変ですッ!!」

と叫ぶ村人。

「何じゃ、騒々しい!!」

と顔をしかめる村長。

「れ…」

連合地球軍が来た

んです…!!」

と、息を切らせて言う村人。

「何じゃと…!?!?」

と、絶句する村長。

◆ 村長が村の中心地にある市場に行くとき…

そこには

ブリトヴァ^{「ドゥエト」}

と

4人のドートレス・フライヤー

がいた。

「私が、この村の村長です。」

何のご用ですか?」

と訊く村長に

「ここに逃げ込んだ、エステルド軍の脱走兵の逮捕に来ました。」

と言うブリトヴァ^{「ドゥエト」}。

まっかつか…

(脱走兵じゃと!?)

クレアとディアナのことか…。

しかし、何故じゃ？

何故、連合地球軍がクレアとディアナを追う？)

と、考えを逡巡させる村長。

とりあえず…

「そのような者は、ここには来ておりません。

来ていたら、連絡してきますよ。」

と、その場を取り繕うとする村長。

ところが…

「連絡なんて無理だよ。

だって、その脱走兵は

さつき、ここに來たばかり

のはずだから。」

とブリトヴァ「ドゥエト」に言われ、絶句する村長。

「な…何かの間違いでしょう…。」

本当に、そのような者は来ておりません。」

と村長は言うが

「ふざけないで…!!」

と、右手に持つマシンガンの銃口を村長に向けるブリトヴァ「ドゥエト」。

まわりにいる4人のドートレス・フライヤーも、村長にマシンガン

の銃口を向ける。

「私達は何も知らずに、ここに來たとも思っているの？」

調べはついているの。

シィとデイを引き渡しなさい。」

と言うブリトヴァ「ドゥエト」。

「なぜ、その娘達を—

はっ!!」

と、村長はシイとデイの名を聞き、思わず口を滑らせてしまった…。
「うそつき…っ★」

と、右手からモノフィラメントワイヤーカッターを射出する
ブリトヴァ^{「ドゥエト」}。

「ギヤアアアツ!!」

と、モノフィラメントワイヤーカッターでバラバラにされてしまう
村長…。

村長が殺害されたのを見た、ことの成り行きを見守っていた村人達
は、一斉に逃げ出した。

バラバラにされた村長の血しぶきが飛び散るのを見たドウエトは

「あは…っ☆

あははっ☆

まっかつか☆

まっかつか☆

と笑いながら、逃げ惑う村人達をモノフィラメントワイヤーカッ
ターで惨殺していく。

ドートレス・フライヤー達も、マシンガンを乱射して、村人達を射
殺していく。

◇ 村の中心地は、地獄絵図と化した…。

「おい…

銃声だぞ…!?!」

と、外から聞こえてくる銃声に驚くゲオルグ。

「クレア達は、ここにいろ。

行こう、ゲオルグ。」

と、ゲオルグと一緒に、外の様子を見に行こうとするロイド。

「パパ!!

行っちゃダメ!!」

と、ロイドを呼び止めるシイ。

「心配するな☆

様子を見てくるだけだ☆」

とシイに笑顔を見せて、ロイドとゲオルグは外に出ていった…。

だが…

2人が戻ってくることはなかった…。

かわりに…

村長の家のドアを蹴破って入ってきたのは…

2人のドートレス・フライヤーだった…。

2人は問答無用でマシンガンを乱射した。

「ママーッ!!」

蜂の巣にされてしまう、シイの母親…。

「ママーッ!!」

デイの母親も蜂の巣にされ…

さらに、村長の家族も蜂の巣にされてしまった…。

幸か不幸か…

シイとデイは撃たれることはなかった…。

2人のドートレス・フライヤーが出ていったあとの村長の家の中は、地獄絵図だった…。

「ママ…」

ママ…!!」

と、シイは泣きながら、母の体を揺するが…

シイは母は動ことも…

声を発することもなかった…。

「許せない…っ!!」

と、2階に上がるシイ。

階段を上がって、右にある部屋に入る。

そこで服を脱ぎ、全裸になるシイ。

ついてきたデイが、部屋の中でシイが服を脱いでいるのを見て

「やるのか…!?!」

と言った。

しかし、シイは答えることなく：

ウイングガンダムセラフイムの装甲服を着た。

「行ってくる…!!」

と言うウイングガンダムセラフイム。

「行け、シイツ!!」

パパとママの仇をとつてくれッ!!

アイツらを生かして帰すなッ!!」

と言うデイ。

ウイングガンダムセラフイムは、部屋の窓ガラスを突き破り、外に飛び出したー。

◇

ブリトヴァのレーダーが、空を飛ぶウイングガンダムセラフイムを捉えた。

「やっぱり、ここにいたんだ…!!」

と、両肩からミサイルを発射するブリトヴァ。

ドートレス・フライヤー達も、マシンガンで乱射する。

飛んできたミサイルを回避、またはマシンキャノンで破壊していくウイングガンダムセラフイム。

(くっ!!)

ドートレス・フライヤーが乱射するマシンガンの弾が数発ほど当たったが、とくにダメージは無い。

(まずは…!!)

と、ドートレス・フライヤーにバスターライフルの照準を合わせ、「いけっ!!」

と、バスターライフルを撃つウイングガンダムセラフイム。

バスターライフルから放たれた大出力ビームは、ドートレス・フライヤーの胸部中央に当たった。

バスターライフルから放たれた大出力ビームは、ドートレス・フライヤーの胸部装甲を簡単に突き破り、その衝撃で、ドートレス・フライヤーの首と両腕がちぎれ飛んだ。

それを見た左隣にいたドートレス・フライヤーが、恐怖にかられ、逃

げ出した。

逃げたドートレス・フライヤーに向け、バスターライフルを撃つウイングガンダムセラフイム。

バスターライフルから放たれた大出力ビームは、逃亡するドートレス・フライヤーの後頭部に命中。

ドートレス・フライヤーの頭が消し飛んだ。

今度は、右方向からマシンガン撃ってくるドートレス・フライヤーに向けて、ウイングガンダムセラフイムはバスターライフルを撃った。

バスターライフルから放たれた大出力ビームは、ドートレス・フライヤーの右足の大腿部に当たった。

ドートレス・フライヤーは、右足がちぎれ飛んだだけでなく、下半身そのものがちぎれ飛んだ。

残ったドートレス・フライヤーが右手にビームサーベルを持って斬りかかってきたが、ウイングガンダムセラフイムはマシンキャノンで迎撃する。

被弾して、たじろいだドートレス・フライヤーに、バスターライフルを撃つウイングガンダムセラフイム。

バスターライフルから放たれた大出力ビームが、ドートレス・フライヤーの腹部に当たり、胸から下がなくなった。

(……!?)

4人のドートレス・フライヤーが、あつという間に全滅させられたのを見たドウエトは、ウイングガンダムセラフイムの強さに戦慄した……。

恐怖で失禁すらしていた。

しかし……

「あはは……☆

まっかつかにしてあげるウツ☆」

と、歓喜と恐怖が入り混じった笑顔で、ブリトヴァ「ドゥエト」はモノフィラメントワイヤーカッターを射出した――。

「えっ…!?!」

それは、一瞬の出来事だった。

何かが、左手に当たったような感触がした…

次の瞬間—!!

「あああああ…っ!!」

シイの絶叫とともに…

シイの左腕の肘から先がちぎれ飛んだ…。

地上に落ちるウイングガンダムセラフイム。

「まっかつか☆

まっかつか☆

と狂喜しながら、モノフィラメントワイヤーカッターを射出する
ブリトヴァ。^{「ドゥエト」}

(ごめん…デイ…。

パパとママの仇をとれなくて…。)

と、死を覚悟するシイ…。

倒れて動けないウイングガンダムセラフイムに迫るモノフィラメ
ントワイヤーカッター…。

だが!!

倒れて動けないウイングガンダムセラフイムの前に、何者かが降り
立った—!!

そして、左手でモノフィラメントワイヤーカッターの先端をつかん
だ!!

「ムダだよ、ドゥエト☆

見切っているよ、こんなの☆」

と言う、倒れて動けないウイングガンダムウイングの前に降り立った人物。
声の感じから、どうやら女性：
それも、少女の声だった。

「あ…あなたは…？」

と、左腕を斬り落とされた激痛に耐えながら、目の前にいる人物に
訊くシィ。

「私の名はラン☆

ガンダムエックスのMS娘だよ☆」

アミットフォース（前）

「えいつ☆」

と、右手に持つ大型ビームソードで、モノフィラメントワイヤーカッターのワイヤーを斬るガンダムエックス。

「これでもう、その武器は使えないね☆」

と、ガンダムエックスは大型ビームソードをしまうと、今度はシールドバスターライフルを右手に持ち、ブリトヴァアを撃つ。

ブリトヴァアは後退しながらガンダムエックスからの攻撃を回避しつつ、左手に持つマシンガンで反撃する。

その時!!

ブリトヴァアの周囲に爆炎があがった。

「きゃあああ…!!」

と、爆風にあおられて、転倒するブリトヴァア。

◇

《ロア☆》

と、仲間の名を呼ぶラン。

「お待ちせえ☆」

と言うのは

ガンダムレオパルドのMS娘のロア。

ブリトヴァアの周囲にあがった爆炎は、ガンダムレオパルドが放ったミサイルによるものだった。

「今日のお客様は

肩デカワイヤー娘のドウエトちゃん

だあ☆

と、左腕のインナーアームガトリングを撃つガンダムレオパルド。ブリトヴァアは、ジグザグに後退しながら、両肩からマイクロミサイルを放つ。

しかし…

「効きませんよお☆」

と、ガンダムレオパルドにブリトヴァが撃ったマイクロミサイルが命中するも、ガンダムレオパルドは、まったくの無傷―!!

「ミサイルっていうのは、こくゆるのをいうんですよお☆」

と、両膝からホーネットミサイルを放つガンダムレオパルド。

ガンダムレオパルドの両膝から発射されたホーネットミサイルは、ブリトヴァの右肩と左の脇腹に命中した。

被弾の衝撃で吹き飛ぶブリトヴァ…。

◇

「す…すげえ…☆」

とデイは、ガンダムエックスとガンダムレオパルドがブリトヴァを追い詰めているのを見て、驚嘆していた。

(それよりも…!!)

と、ウイングガンダムセラフイムのもとに駆け寄るデイ。

「おいッ!!」

シイッ!!

しっかりし…

うっ…。」

と、左腕を失い、苦痛に顔を歪めているウイングガンダムセラフイムを見て、思わずえづいてしまうデイ…。

そんなデイのそばに、空から何者かが降り立った。

「だ…誰だ、お前…!?!」

と、警戒するデイ。

「心配するなよ★」

味方だよ★

私は

ガンダムエアマスターのMS娘のスー

つて者だ★「

と名乗るガンダムエアマスター。

「つくかよ…」

この娘、早く手当しねえとヤベエな★「

と、ウイングガンダムセラフイムを抱きかかえるガンダムエアマス

ター。

「お…おい!!」

シイをどうするつもりだ!？」

と訊くデイ。

「私達の母艦に連れて行って、治療する★」

と言うガンダムエアマスター。

「えっ!？」

母艦…?」

と首を傾げるデイ。

「お前も来い★」

「をわあッ!？」

とデイも抱きかかえて、ガンダムエアマスターは空に飛び上がった。

◇

《件のMS娘は回収した★

お前らも、適当なところで切り上げて撤収しろ★》

と、ガンダムエアマスターからの通信が入った。

「どうする、ロア?」

と訊くガンダムエックス。

《ここまでできたら、肩デカワイヤー娘の首は取りたいねえ☆》

と言うガンダムレオパルド。

「ブリトヴァの首を取るから、もうちょっと待っててね☆」

と、ガンダムエアマスターに報せるガンダムエックス。

「じゃ、ロア☆

ブリトヴァの首を取るぞ☆」

と言うガンダムエックス。

《了解…

…って、ちよつと待って…

何か来る…!!》

と叫ぶガンダムレオパルド。

次の瞬間―

ガンダムエックスとガンダムレオパルドの周囲に爆炎があがった…!!

(空からの攻撃…!?)

と、空を見上げるガンダムエックス。

(!!)

上空には

ガンダムヴァサーゴ

と

ガンダムアシユタロン

がいたー!!

◆

「アミットフォースか…。」

と、ガンダムエックスとガンダムレオパルドを見下ろすガンダムヴァサーゴ。

「オルヴァはドウエトを回収して撤収しろ!!」

と、ガンダムアシユタロンに指示するガンダムヴァサーゴ。

《了解。》

と、降下していくガンダムアシユタロン。

《シャギアツ!!》

と叫ぶガンダムエックス。

「よくも、ドウエトをかわいがってくれたな…!!」

礼の1つや2つ、させてもらおうか…ツ!!」

と、両手のクロービーム砲を撃つガンダムヴァサーゴ。

◇

「シャギアの相手は私がするツ!!」

ロアはオルヴァをツ!!」

と、ガンダムヴァサーゴからの攻撃を回避しながら、ガンダムレオパルドに指示を出すガンダムエックス。

《まかされた!!》

と、ガンダムアシユタロンに立ち向かっていくガンダムレオパルド。

「よし…!!」

いくぞ、シャギアツ!!」

と、右手に大型ビームソードを持って、空に飛び上がるガンダムエックス。

ガンダムヴァサーゴも右手にビームサーベルを持ち、右腕を伸ばす。

!!

ガンダムヴァサーゴの斬撃をビームサーベルで受け止めるガンダムエックス。

ガンダムヴァサーゴの斬撃を受け止めるため、一時的に空中で静止したガンダムエックスの隙を狙って、ガンダムヴァサーゴは左腕を伸ばし、クロービーム砲を撃つ。

ガンダムヴァサーゴからの攻撃を回避するため、後退するガンダムエックス。

ガンダムヴァサーゴは、スラスターを噴かして、後退したガンダムエックスを追う。

モビルアーマー形態に変形したガンダムアシユタロンは、シザースビーム砲とノーズビーム砲でガンダムレオパルドを撃つ。

「うわあっ!!」

と周囲にあがる爆炎にたじろぐガンダムレオパルド。

その隙に、ブリトヴァはガンダムアシユタロンに載る。

「ドウエトを回収したよ、姉さん☆」

とガンダムヴァサーゴに報せるガンダムアシユタロン。

◆

「よくやった、オルヴァ☆」

と、オルヴァを褒めるシャギア。

「では、さらばだ、アミットフォース!!」

とガンダムヴァサーゴの胴体が上下に伸びて、メガソニック砲の発射態勢に入る。

メガソニック砲の砲口にエネルギーが集束されていき…

拡散モードでメガソニックを発射した!!

◇

「うわあああ…ッ!!」

ほとぼしるビームの乱流に、防御姿勢をとるガンダムエックス。

「あっ…!?!」

しまった…!!」

姿勢を正すと、もう、そこにはガンダムヴァサーゴの姿は無かつた…。

《すまない、ラン…。

逃げられてしまった…。》

と、ロアからの通信が入った。

「くっそお〜★

せつかく、あそこまで追い詰めたのに…ッ★」

と、悔しがるラン…。

(それにしても…。)

と、地上を見下ろすラン。

そこには…

正視に堪えない、凄惨な光景が広がっていた…。

アミットフォース（後）

（？）

シイが目を覚ますと…

（……）…

どこ…？）

視界に飛び込んだきたのは、見たことのない、白い天井…。

そこでシイは、今、自分はどこかの施設のベッドに寝かされているのだと感じた。

「先生!!」

気がついたよ!!」

という、女性…というよりかは、少女の声が聞こえた。
しかも、その声に聞き覚えがある…。

先生…

おそらく、教師ではなく、医者の方だろう。

つまり、今、自分は病院のベッドに寝かされているのだと、シイは実感した。

まもなく、ベッドの左側に先生が来た。

「気がついたかい？」

と訊いてくる先生。

眼鏡をかけた、背の高い、おそらく30代後半くらいの歳の男性だった。

「ここは、どこですか？」

と訊くシイ。

「ここは

フリーデンの医務室

だよ。

ああ、フリーデンというのは

アミットフォースの母艦

だよ。」

と言う先生。

(フリーデン?)

アミットフォース?)

何のことなのか、さっぱりわからない…。

シイは起き上がろうとしたが…

どういうわけか、体に力が入らない…。

「起きるのは、まだ無理だ。」

まだ麻酔が効いているはずだからな。」

と言う先生。

(麻酔…?)

つまり、手術されたということか?

しかし、何の手術だろう?

手術を受けるほど、体に異常は無いはずだが…?

(あっ…!!)

そうだ…

左腕…!!)

と、ブリトヴァ「ドゥエト」のモノフィラメントワイヤーカッターで左腕を斬り

落とされたことを思い出すシイ。

「先生…!!

私の左腕は…!?!」

と訊くシイ。

「接合手術は成功したよ。」

ただ、完治するまでは、まだ時間がかかる。」

と言う先生。

(接合…?)

斬り落とされた左腕が、くっついたって…!!?)

と、驚くシイ。

「明日、我々のことについて

アミールさん

から説明がある。」

と言う先生。

「アミールさん…?」

と訊くシイに

「我々

アミットフォースの司令官

だ。」

と答える先生。

その

アミットフォース

というのが何なのか知りたかったが…

それについて、明日、説明されるといふのなら、明日まで待とう…。

何より、眠い…。

先生は、麻酔が効いていると言っていた。

眠いのは、そのせいだろう。

なら…

明日まで、眠らせてもらおう…。

◇

翌日―。

シイとデイは、赤いパーカーを着た少女に案内されて、フリーデンの艦長室に来た。

室内には、案内してきた少女を含め、5人…いや、4人の少女がいた。

1人は、どう見ても成人女性で、執務席に座る少女の右隣に立っている。

正面の執務席に座っていた少女が立ち上がり

「アミットフォースの母艦フリーデンにようこそ。」

私がフリーデンの艦長にして、アミットフォースの司令官の

アミール・オルフェーヴ

です。」

と名乗った。

そして、シイとデイの前まで歩いてきた。

(この少女が、昨日、先生が言っていたアミールさん…?)

と、アミールを見るシイ。

デイと同じくらいの身長、小柄な少女だ。

しかし、少女とはいえ、フリーデンの艦長にしてアミットフォースの司令官というだけあって、威厳を感じさせる雰囲気をもとつていた。

「左腕の具合はどう?」

と、シイに訊くアミール。

「まだ完治していませんが、痛みはありません。」

と答えるシイ。

そして、アミールと握手する。

デイとも握手をしたあと、再び、執務席に戻るアミール。

「紹介するわ。」

私の秘書の

レイナ

よ。」

と、右隣に立っている成人女性を紹介するアミール。

「アミール様の秘書を務めさせていただきます」

レイナ

という者です。

以後、お見知り置きを。」

と礼をするレイナ。

「そして、そこにいるのが」

と、部屋の左側に並び立つ3人の少女を紹介するアミール。

「私

ガンダムエックスのMS娘のラン☆

よろしくね☆」

と名乗るラン。

シイとデイを連れて来た、赤いパーカーを着た少女だ。

「ガンダムエアマスターのMS娘のサー

だ★」

と、ぶっきらぼうに名乗るサー。

「ガンダムレオパルドのMS娘のロア

だよお☆

よろしくう☆」

と名乗るロア。

「エスタルド軍MS部隊所属、パイロンのシイです。」

と名乗るシイ。

「エスタルド軍MS部隊所属、パイロンのデイだ。」

と名乗るデイ。

「資料では、貴女達の名前は

クレア

と

ディアナ

となっているのだけど？」

と訊くアミール。

「おそらく、そうなのでしょうけど…。」

と言うシイ。

「どういうことかしら？」

とアミールが訊いてきたので、シイはエスタルド軍の人工MS娘について、自分が知る限りのことを話した。

「なるほど…。」

「貴女達は、その名前が気に入っているということね。」

と言うアミール。

せつかく、親からあたえられた名前だが、どうにも、しつくりこな

い…。

シイとデイ^cという無機質的な名前の方が、妙に愛着があつた。
「わかつたわ。」

貴女達のごとは、シイとデイと呼ぶことにするわ。」
と言うアミール。

「あの…」

アミールさん達は…？」

と訊くシイ。

「アミットフォース

の事を知りたいのね。」

とアミールに言われ、頷くシイ。

「貴女達

アミット・オルフェーヴ

という人物の名前をご存知かしら？」

とアミールに訊かれたが、知らないのです、シイとデイは首を横に
振つた。

「アミット・オルフェーヴイラスト：黒瀬夜明 リベイク：

私の曾祖父にして、百数十年前の連合地球軍の将校

だつた人物よ。」

と言うアミール。

アミールの話は続く。

「百数十年前…」

黒色機動群の勢力圏も残り僅かとなつたある日、アミットはM・
G・F・ の創設者であるシン・クロサキから、衝撃的なことを言わ
れたの。

それは

連合地球軍がM・G・F・ を吸収し、全世界防衛機構軍として権力
を握る

という話だつたわ。

そうなつた時のために、シンはアミットに

腐敗した連合地球軍を止めるためのカウンターウエポンが必要になる

と訴えたの。

そのカウンターウエポンこそが、私達

アミットフォース

なの。」

(.....)

アミールの話を聞いて、絶句するシイとデイ。

「本来、M・G・F は人類を黒色機動群から守り、地球を取り戻すための組織だったのに、今では人間に対し、その力を振るっているわ。

アミットは、間違った方向へ進んだ連合地球軍を止めるために、アミットフォースを結成したの。

その際、シンから

熾天使

有罪の死神

危険な銃腕

砂漠の獅子

天駆ける龍

が、アミットフォースの力になると話したの。」

と言うアミール。

「何ですか？」

その…

天使とか、死神とかって？」

と訊くシイ。

「アミットフォースのためにシンが開発した装甲服

のことよ。

表向きは

一般兵士でも使える装甲服の開発

という名目で開発されたのだけど

計画は失敗に終わったと偽り、完成した装甲服を世界各地に隠したのよ。」

と言うアミール。

(セラフイム
熾天使…!?)

「じゃ…」

ウイングガンダムセラフイムは…!？」

と訊くシイに

「そうよ。」

ウイングガンダムセラフイムは、シンがアミットフォースのために開発した装甲服の1つ

なのよ!!」

と言うアミール。

「それだけではなく、シンは

本物のMS娘を見つける方法もアミットに教えていたの。

そうやって見つけたのが、そこにいるラン達よ。

ラン達は、人工MS娘じゃない。

モビルスーツの魂を宿した

本物のMS娘

なのよ…!!」

とアミールに言われ、ラン達を見るシイとデイ。

「なんだよ…」

話が全然違うじゃねえか…ツ!!

シン・クロサキって野郎は、黒色機動群を撃退した後、M・G・F. を率いて世界征服した極悪人じゃねえのかよツ!？」

と叫ぶデイ。

「それは、連合地球軍によって捏造された話…。

アミットとシン・クロサキは、本当に人類と地球を守るために戦った英雄よ。

しかし、今の連合地球軍は、アミットとシンの理想を踏み躪った悪なのよ…!!」

と言い放つアミール。

シン・クロサキは、黒色機動群を撃退した後、M・G・F. を率

いて世界征服した極悪人だと聞かされていたシイとデイにとって、ア
ミールが語る真実は衝撃的な話だった…。

新たな戦い

「どうする、シイ、デイ。」

私達と一緒に来る？

それとも…？」

と訊くアミール。

「どうする…と訊かれても…。」

と、デイと顔を見合わせるシイ。

「アチキは、アンタらについて行くよツ!!」

パパとママの仇をとりたいんだツ!!」

と叫ぶデイ。

そう…

シイとデイの両親は、M・G・F に殺されたのだ。

それだけでも、シイとデイがアミットフォースに加入し、M・G・

F. と戦う理由になる。

とくに、シイにとっては、左腕を治してくれた恩もある。

もはや、帰る場所も無いシイとデイには、アミットフォースに加入する以外の選択肢は無かった…。

こうして、シイとデイは、アミットフォースの一員となったのだ。



「^{「シヤギア」}ガンダムヴァサーゴ、^{「オルサア」}ガンダムアシユタロンとともに、^{「トウエト」}ハルフエース6に帰艦してきたブリトヴァ。

装甲服を脱いだドウエトは、シンに報告するため、ブリッジに上がる…。

「部下を皆殺しにされただけでなく、脱走兵がアミットフォースに合流したとおツ!」

と、ドウエトの報告を聞いたシンが激怒する。

「ご…ごめんなさ」

「謝って済む問題じゃねえんだよツ!!」

と、ドウエトを蹴飛ばすシン。

「もうしわけございません。」

私も、アミットフォースのMS娘を撃墜するべきでした。」
と謝罪するシャギア。

「当たり前だッ!!」

この役立たずどもがアッ!!」

と、シャギアを蹴飛ばすシン。

「だいたい、テメエに出撃命令出した覚えはねえぞッ!!
勝手に出撃しやがってッ!!」

と、倒れているシャギアを蹴るシン。

オルヴァは、シャギアとドウエトが蹴飛ばされているのを見て、薄ら笑いを浮かべていた。

「おいッ!!」

と、倒れているシャギアの胸ぐらをつかむシン。

「フラッシュシステムは起動したのか?」

と訊くシン。

「それは…。」

と、顔を背けるシャギア。

「役立たずがアッ!!」

と、シャギアを殴るシン。

「おめえらよお…」

装甲服着て好き勝手暴れてくれるのは結構だがよ…

けどよ

おめえらの本来の目的はよお、フラッシュシステムを起動させること
なんだよ。

つまりよお、おめえらはな

フラッシュシステムを動かすための電池であつて、モルモット
なんだよ。

でもよお…

フラッシュシステムを動かせないんじや、お前ら、いら
ないわけよ。

そこんどこ、わかってんのか？」

と言いつ放つシン。

「はい…。」

と、力無く答えるシャギアに

「わかってたらよ…」

フラッシュシステムを動かせ
自分の役目を果たせ

よ。」

と言うと、艦長席に座るシン。

「ハルフェース6、発進だツ!!」

と命じるシン。

「アミットフォースを追うのですか？」

と訊くシャギアに

「だったら、よかつたんだけどよ…」

上層部から、ニューヨークに帰還せよって命令が来たんだよ★」

と言うシン。

「では、アミットフォースの追討は？」

と訊くシャギアに

「M・G・F. の一般部隊が当たるそうだ。」

と言うシン。

「それでは、シン・クロサキ兵団の名折れでしょう。

そこで

私とオルヴァをシン・クロサキ兵団の分遣隊として、アミットフォー

ス追討部隊に派遣する

というのは、どうでしょうか？」

と進言するシャギア。

「テメエ…」

ヘンなところで頭が切れる

な…★」

と、顔をしかめるシン。

「とはいえ、勝手なことではできねえ。

上層部に訊いてみる。」

「おい、本部との回線を開け!!」
とオペレーターに指示するシン。
まもなく、モニターに、M. G. F. 本部の高官の顔が映し出される。

《どうした、シン?》

と訊いてくる高官。

シンは、シャギアの進言を高官に伝えた。

しかし…

《その必要は無い。

アミットフォース追討部隊には

シン・クロサキ兵団に加入予定の新人が加わる。

お前達は余計なことをせず、ニューヨークに帰還せよ!!》

と高官は言って、通信を切った。

(シン・クロサキ兵団
オレの部隊の新人?)

何者だあ?)

と、顔をしかめるシン。

「新人って…

どういうことなのでしょう?」

と訊くドウエト。

「つまりだ。

お前らが、いつまでたってもフラッシュシステムを起動させられないからクビ

ってこつたらうよ★」

と言い放つシン。

そして、艦内放送で

「シン・クロサキ兵団司令官のシンだ。

これより我々は、ニューヨークに帰還する。

総員、発進準備に取り掛かれ!!」

と、ハルフェース6の発進準備を命じた。

20分後―。

ハルフェース6は、ニューヨークに向かって飛び立った―。

◇

アミットフォースの母艦フリーデンの艦橋では、レイナがシン・クロサキ兵団の母艦ハルフェース6が離陸したことを、アミールに報告していた。

「ハルフェース6が？」

なぜ？」

と訊くアミール。

「理由はわかりませんが、おそらく、エスタルドの降伏により、ここに駐留する理由がなくなつたためかと…。」

と言うレイナだったが

「しかし、私達アミットフォースがいるのに、なぜ、ニューヨークに戻るのですか？」

と、アミールは訊き返す。

「たしかに…。」

言われてみれば、そうですね…。」

と驚くレイナ。

(私達を無視する理由…)

それは何…?)

と、アミールは考える。

「あと、私達自身はどうしますか？」

エスタルドに駐留しているM・G・F. と交戦しますか？」

と訊くレイナ。

「そうね。」

ガスタールとノーザンベルからの援軍が到達するまで、ちよつかい
は出すべきね。

そして、頃合いを見計らって撤収よ。」

と言うアミール。

「了解しました!!」

ラン達に出撃命令を出します!!」

と、レイナはアミールに敬礼した―。

レイナは内線で、ラン、スー、ロアに出撃命令を下す。
「出撃？」

シャギア達が、また来たの!？」
と、自室で半裸姿でいたランが訊き返す。

《いいえ。

エステルドに駐留しているM・G・F。 に攻撃を仕掛けてくだ
さい。く

と言うレイナ。

「そっか☆

それで、シャギア達をおびき出すんだな☆」
とランが言うが

《いえ。

シン・クロサキ兵団は撤退しました。く

と言うレイナ。

「えっ？

シャギア達、いないの？」

と訊くランに

《はい。

鬼の居ぬ間に何とやらです。

おもいつきり暴れてきてください☆く

と言うレイナ。

「まかされたあ☆」

と、敬礼するラン。

内線を切ると…

「ラン…。」

また、戦いに行くの？」

と訊く、ヘッドにいる半裸姿の少女。

「うん☆」

とランは答え、部屋の電気をつける。

明るくなったことで、ヘッドにいる半裸姿の少女は、シーツで躰を
隠す。

ランは、赤いパーカーを着て、黒いホットパンツを履くと

「じゃ、行つてくる、ティファ☆」

と、ヘッドにいる少女―ティファにキスをしてから、部屋から出ていった―。

フリーデンの医務室では―。

「何、出撃？」

本艦も？」

と、医務官のテクスが、内線で話をしていた。

「何かな？」

と言うシイ。

「なんか、出撃がどうか言っていたぜ？」

と言う、シイの見舞いに来たティ。

テクスが、シイとデイの所に来た。

「これから、ラン達が出撃するそうなんだが…

本艦も支援砲撃するために進撃するそうだ。

ここには怪我人がいるから支援砲撃はやめてほしいと、レイナに言ったんだがな…。」

と言うテクス。

医務室にシイがいるので、支援砲撃の中止をレイナに進言したが、却下されたようだ。

「アチキも行く!!」

と言い出すデイ。

「君に使える装甲服があればな。」

と言うテクス。

「あのガンダムがあるじゃないかッ!!」

アチキはこれでも、エスタルド軍のMS娘なんだッ!!」

と叫ぶデイ。

「あれは今、調査中で使えない。」

と言うテクス。

「そんな…!?!」

頼むよ、先生ッ!!

アチキも行かせてくれッ!!

パパとママの仇をとりたいんだッ!!」

と、テクスにつかみかかるデイ。

「落ち着きたまえ!!」

そんなこと、私に言われても困る!!」

と、デイを引き離すテクス。

「まったく…」

しょうがない娘だな…!!」

と怒りながらも、テクスはレイナに内線をつなぐ。

「いいのか?」

と、テクスがレイナに訊き返しているのが聞こえた。

内線を切り、デイに向かって

「使える装甲服があるようだ。

1人でも戦力が欲しいようだ。」

と言うテクス。

「よっしやあーッ☆」

と喜ぶデイ。

「行ってくるぜ、シイ☆

シイのパパとママの仇もとってきてやるぜ☆」

とデイは、喜び勇んで医務室から出ていったー。

月下の出撃

空に上弦の半月が輝いている午後8時―。

ラン達が更衣室で、装甲服の下に着るアンダースーツに着替えていたら、デイが入ってきた。

「おっ☆

助っ人参上☆」

と言うラン。

「お…おう…☆」

と答えるデイ。

「…で、ここで何をするんだ？」

と訊くデイ。

「ここで、装甲服の下に着るアンダースーツに着替えるの。」
と教えるロア。

「ほれ★」

と、デイにアンダースーツを投げ渡すスー。

「へえ…。」

「こんな物着るんだ…。」

と、服を脱ぎ始めるデイ。

「こんな物って…★

エスタルドじや、アンダースーツ無いのか？」

と、スーは冗談のつもりで訊いたのだが

「ああ。

装甲服とのシンク口率を高めるため、全裸にならなきゃならなかったからな★」

と言うデイ。

「マヂか…★」

と、ドン引きするスー。

デイがアンダースーツに着替え終わると

「じゃ、行くよ☆」

と、ランを先頭に、更衣室を出て、発進デツキに向かう。

発進デツキにて

ランはガンダムエックス

スーはガンダムエアマスター

ロアはガンダムレオパルド

の装甲服を纏う。

「アチキは？」

と訊いてくるディに、チーフメカニツクのセイビが
「嬢ちゃんのは、これだよ。」

と、緑色の装甲服をディに渡す。

「何だ、これ？」

と訊いてくるディに

「ジェニスの装甲服だ。」

と言うセイビ。

「へえ…★」

と、ジェニスの装甲服を眺めるディ。

緑色の曲面装甲が、なんとなく、ガスタール軍のパイロンを思わせるため、不服な顔をするディ。

(まあ、いっか…★)

と、渋々、ジェニスの装甲服を着るディ。

装甲服を着終わると、いよいよ出撃だ。

発進デツキのハッチが開く。

「行くぞッ☆」

とガンダムエックスを先頭に

ガンダムエアマスター

ガンダムレオパルド

ジェニス

が、フリーデンの後ろから発進する。

目指すはM・G・F。 エスタルド駐留部隊の基地―。

◇ 進撃するガンダムエックス達の後方を、アミットフォースの母艦フリーデンが追走する。

「これより、本艦はラン達の支援砲撃を展開する!!」

主砲、発射用意!!」

と、艦橋で指示を出すアミール。

フリーデンは停止し、主砲の発射態勢に入る―。

アミットフォースの母艦フリーデンは

全長 88メートル

全高 32メートル

全幅 52メートル

重量 4260トン

の、陸上戦艦と呼ばれる巨大なホバークラフトである。

しかし、フリーデンの艦種は陸上戦艦ではなく、陸上輸送艦である。双胴式の艦体で、左舷側は居住区、右舷側は貨物デッキとなっているが、その貨物デッキを、MS娘の発進デッキに改造している。

戦闘艦ではないため、武装は左舷側に装備されている、自衛用の3インチ連装砲塔が1基あるのみである。

こんな武装で、ガンダムエックス達の支援砲撃をするというのだから、無謀もいいたころである。

はつきりいって、仮にも戦闘部隊であるアミットフォースの母艦には不向きな艦である…。

「主砲、発射準備完了!!」

と、報告するオペレーター。

「撃て!!」

とアミールの号令一下、フリーデンの主砲が火を吹いた。

主砲といっても、口径が3^{7.6}インチでは、虚仮威しにしかない…。放たれた砲弾は、M・G・F。 基地内に小さな爆炎をあげた。

しかし、基地内を混乱させるには、十分な威力であった―。

◆ M・G・F　エステルド駐留部隊の基地内で、突如起きた爆発に、基地内の隊員達はパニックにおちいつていた。

「何事だっ!?!」

と叫ぶのは、MS娘部隊の隊長のアム。

「わかりませんが、おそらくは、何者かによる砲撃と思われます!!」
と答える、ドートレスの装甲服を着た隊員。

(我々に攻撃を仕掛けてくる者とは…)

何者だ?)

と考えるアム。

「隊長…」

どうでしょう…?」

と訊いてくる隊員。

そこに、別のドートレスが

「敵襲です!!」

アミットフォースです!!」

と報告に来た。

「わかった!!」

私も出る!!

お前達は、すぐに迎撃にあたれ!!」

と、2人のドートレスに下令するアム。

「了解!!」

と、アミットフォースの迎撃に向かう2人のドートレス。

アムは、アッセンブルームへと向かう―。

アッセンブルームに来たアムは、自身の専用の装甲服

ガンダムデリンジャーアームズ

を装着する。

このガンダムデリンジャーアームズの装甲服…

聞けば数十年前、初代シン・クロサキ主導のもと、MS娘ではない、一般兵士でも使える装甲服として開発された物らしい。

しかし、装甲服の開発は失敗したようで、完成した装甲服は行方不明となった。

ところが数年前、北米のとある廃工場にて、行方不明になっていたガンダムデリンジャーアームズの装甲服が発見されたのである。

回収された装甲服は修繕された後、アムの専用装甲服として、アムの手に移ったのである…。

ガンダムデリンジャーアームズの装甲服を装着したアムは

「これより、当基地に侵入してきたアミットフォースを迎撃する!!」
と下令し、4人のドートレスを連れて、出撃した―。

◇

基地に攻め込んだガンダムエックス達は、ドートレス達と銃撃戦を展開していた。

「そこおっ!!」

と、シールドバスターライフルを撃つガンダムエックス。

シールドバスターライフルから放たれたライムグリーンのビームが、ドートレスの胸を撃ち抜いた―。

「オラオラアッ!!」

とガンダムエアマスターが空を飛びながら、両手に持つバスターライフルを乱射する。

ドートレス達がマシンガンで、上空にいるガンダムエアマスターを撃つが、まったく当たらない。

逆にガンダムエアマスターの攻撃により、1人、また1人と、ドートレスが撃ち倒されていく―。

3人のドートレスが、ガンダムレオパルドにマシンガンを撃つが、ガンダムレオパルドは無傷…。

「お返し☆☆☆」

と、ガンダムレオパルドは左腕のインナーアームガトリングで、3人のドートレスを撃ち倒した―。

ジエニスが

赤い装甲服を着たMS娘

にマシンガンを撃つが、命中しているのに、火花が散るばかりで、効いている様子はない。

逆に、相手が右手に持つダブルガトリングガンによる反撃を、ジエニスは慌ててコンテナの陰に隠れる。

そこに、ガンダムエアマスターが来た。

《何やってんだ、デイ!!》

と、ガンダムエアマスターからの通信が入る。

「うっせえツ★

赤いやつが強いんだよツ!!」

と言うジエニス。

《おめえが弱いんだよ★

見てろよツ!!》

と、コンテナの陰から飛び出すガンダムエアマスター。

そして、両手に持つバスターライフルを乱射する。

この攻撃で、赤い装甲服を着たMS娘に随伴していた4人のドートレスのうち、2人を撃ち倒したが…

赤い装甲服を着たMS娘が右手に持つダブルガトリングガンと、胸から発射するガトリングガンによる反撃をうけ、慌ててコンテナの陰に隠れるガンダムエアマスター。

「どうだ？」

シャレになんねえヤツだろ？」

と言うジエニスに向かって

《はあっ!?!

おめえ、ナニ言ってるんだツ!?!

あんなヤツ、たいしたことねえぢやねえかツ★》

と、強がるガンダムエアマスター―。

「逃げてくるくせに、よくそんなこと言えるな★」
と、あきれられるジエニス。

《ああ!?

ねぼけてんのかツ★

誰が逃げてんだよツ★

退避している

んだよツ★

と言いつ張るガンダムエアマスター…。

ジエニスとガンダムエアマスターが、不毛な言い合いをしていると、赤い装甲服を着たMS娘と2人のドートレスが撃つてきた。

「ひえええええ…ツ★」

と、逃げ出すジエニスとガンダムエアマスター…。

逃げるジエニスとガンダムエアマスターを追う赤い装甲服を着た

MS娘と2人のドートレス。

そこに…

ガンダムエックスが現れたー!!

ガンダムエックスは赤い装甲服を着たMS娘にシールドバスターライフルを撃つが、赤い装甲服を着たMS娘は回避する。

だが、随伴していたドートレスに当たってしまった。

「この距離でかわすなんて、只者じゃないね…★」

と言うガンダムエックス。

「お前も、いい腕をしている。」

と、ガンダムエックスを称える、赤い装甲服を着たMS娘。

「ありがと☆

一応、名前教えてくれる？」

と訊いてきたガンダムエックスに

「私の名はアム!!」

ガンダムデリンジャーアームズのアム

だ!!」

と、赤い装甲服を着たMS娘…アムは名乗ったー。

フリーデンの危機

フリーデンのブリッジでは―。

「アミール司令。」

ランからの通信です。」

と言うオペレーター―。

「繋いで。」

と指示するアミール。

すると、モニターにランの顔が映し出された。

「どうしたの?」

と訊くアミール。

《なんかさ…》

赤くて、メチャクチャ強いヤツがいるんだけど★

名前は…

えっと…

ガンダムデリバリ…?<

と言うガンダム^{ラン}エックス。

《デリンジャーアームズ★》

と、横から言うロア。

「何ですって…!?!」

と、デリンジャーアームズの名を聞いて、驚くアミール。

「ガンダムデリンジャーアームズ…

シン・クロサキが私達のために遺した、5つの力の1つですね…。」

と言うレイナ。

「それがなぜ、M. G. F. に?」

と訊いてくるアミールに

「残念ですが、M. G. F. が私達よりも先に見つけてしまったのでしよう。」

と言うレイナ。

百数十年前：

M・G・F. の創設者であるシン・クロサキは、腐敗した連合地球軍を止めるためのカウンターウェポンとして、表向きは一般兵士でも使える装甲服の開発として

熾天使

有罪の死神

危険な銃腕

砂漠の獅子

天駆ける龍

という、5つの装甲服を完成させた。

そして、来る日に備えて、完成した装甲服を世界各地に隠したので…

「どうやら、世界各地に隠したことが、かえって裏目に出してしまったようですね…。」

と言うレイナ。

「…で、いかがなさいますか？」

破壊しますか？」

と訊くレイナ。

「あれは、シン・クロサキが私達のために遺した物よ!!」

とアミールはレイナに言う

「あれは、シン・クロサキが私達のために遺した物よ!!」

装着者を捕縛しなさい!!」

と、ガンダムエックス達に命令するアミール。

《捕まえろってこと!?

どうやって!?!>

と訊いてくるガンダムエックスに

「それくらい自分達で考えて、努力しなさい!!」

と、無責任なことを言っ、アミールは通信を切った…。

「無茶すぎませんか？」

と、アミールを諫めるレイナ。

「そんなこと、わかっているわよ!!」

でも、ガンダムデリンジャーアームズを喪うわけにもいかないでしよ!!」

と開き直るアミールに、苦笑するレイナ。

その時

「アミール司令!!」

と、オペレーターが声をかけてきた。

「どうしたの?」

とアミールが訊くと

「上空から、何かが降下してきます!!」

と言うオペレーター。

「ガスタールか、ノーザンベルからの援軍でしょうか?」

と言うレイナ。

「識別コードは?」

と訊くアミールに

「識別コードは…」

黒色機動群

です…ッ!!」

と叫ぶオペレーター。

「何ですって!?!」

と驚くアミール。

「映像確認!!」

と、モニターに表示するオペレーター。

モニターを見れば

黒色機動群の気圏突入カプセル

が3機、降下してきていた。

「どこに向かっているの?!」

と訊くアミールに

「コース算出…」

これは…

あと3分後に、本艦の西30キロ地点

に到着します!!」

と叫ぶオペレーター。

「カプセル1機につき、4体の機動兵器…合計12機…。

そんなのに襲われたら、本艦はひとたまりもありません。」

と、異様に冷静な声で言うレイナ。

「わかっているわよ、そんなこと!!」

本艦の防衛のために、誰かを呼び戻しましょう!!」

と言うアミール。

「なら

サテライトキャノンを持つラン

が適任ですね。」

と言うレイナ。

それを聞いたアミールは

「ラン、聞こえる?」

と、ガンダムエックスに通信を入れる。

《今度は何?》

と訊いてくるガンダムエックスに

「本艦が黒色機動群の襲撃を受ける可能性が高いわ!!

ランは本艦の護衛に当たって!!」

と言うアミール。

◇

前線では…。

「大変だ…!!」

ティファを助けに行かなくちゃ!!」

と慌てるガンダムエックス。

「つか、このタイミングで黒色機動群かよ…★」

と、ため息をつくガンダムエアマスター。

《ランとスーは、フリーデンに戻って。》

と、ガンダムレオパルドからの通信が入った。

「いいの？」

と訊いてくるガンダムエックスに

《愛するティファが、どうなってもいいの？》

と言うロア。

「それもあるけど…」

ロアは大丈夫なの？」

と言うガンダムエックス。

《人工MS娘に負けるほど、私もヤキが回っていないわ★

それに、デイもいるしね★》

と言うガンダムレオパルド。

「なら、まかせたよ!!」

と、空に飛び上がり、フリーデンに向かうガンダムエックス。

《死ぬなよ…!!》

と言って、ガンダムエックスの後を追って、空に飛び立つガンダム

エアマスター。

「やて…」

残された私達は、あの、コワイおねえさんの相手をするよ…★

と言うガンダムレオパルド。

《おうツ★》

と応えるジェニス。

「でも、デイは雑魚の相手を頼むよ。」

と言うガンダムレオパルド。

《何でだ？》

と訊いてくるジェニスに

「ジェニスのマシンガンが効くとは思えないからね。」

と言うガンダムレオパルド。

デイも、そんな気がした。

《なら、アチキは女同士の戦いに手出ししてくる不粋なヤツらをブツ殺してくるわ★》

「気をつけてね★」

《お互いにな★》

とグータッチして…

ジエニス^{【デ】}は周囲のドートレスに…

ガンダムレオパルドはガンダムデリンジャーアームズに立ち向かっていった―。

◇

空を飛んで、フリーデンに向かうガンダムエックスとガンダムエアマスター―。

「あ…あれは…!？」

とガンダムエックスが上空を見上げれば、黒色機動群の大气圏突入カプセルが火の玉となって落下してきていた。

破壊したいが、カプセルの外装は非常に硬く、ビームライフル程度の火力では破壊できないのだ…。

やがて、カプセルは西の方に落下していった。

《たぶん、地面に落ちたな…。》

ランはフリーデンに向かえ!!

私が時間を稼ぐ!!》

と言うガンダムエアマスター。

「頼んだ!!」

と、ガンダムエックスはフリーデンに向かい、ガンダムエアマスターはカプセルが到着した西に向かう―。

ガンダムエアマスターが、カプセルの到着地点に到着すると…

「あ…あれは…!？」

と、カプセルから出てきた黒色機動群の機動兵器を見て驚く。

「何だ、アイツ…?」

見たことないぞ…!？」

と、ガンダムエアマスターは、カプセルから出てきた黒色機動群の機動兵器の映像をフリーデンに送信した―。

◇

フリーデンのブリッジでは――

「スーから、敵機の映像が届きました。」

と、オペレーターがモニターに映像を映す。

「あ……あれは……!?!」

と映像を見たアミールが驚く。

「どうやら、新型機の様ですね。」

と言うレイナ。

黒色機動群の気圏突入カプセルから出てきた機動兵器は、これまでに確認されていないタイプだった――。

サテライトキャンノン

フリーデンの医務室では――

「先生……」

何かあったのですか？」

と、テクスが内線で話しているのを見たシイが訊く。

「大変なことになった。」

本艦の近くに、黒色機動群が降下したらしい。

今、ランとスーが対処に当たっている。」

と言うテクス。

「そうですか……」

なら、安心ですね。」

と答えるシイ。

「ところが、そういうわけにもいかんようだ。」

今回、降下してきたのは、いつものような廃棄処分ではなく、新型機らしい。」

と言うテクス。

「えっ、新型？」

と驚くシイ。

「これまで、黒色機動群は廃棄処分として、古い機動兵器を降下させてきていた。」

それらは旧式兵器ゆえに、連合地球軍によって簡単に撃破されてきたが……

しかし、今回、降下してきたのは新型機ということ、これまでの廃棄処分で、戦闘データを取り続けていたんだ。

もしかしたら、黒色機動群の反攻が始まるのかもしれない。」

と言うテクス。

「なら、私も出撃します!!」

ランさんやスーさんのお手伝いをしてきます!!」

とシイが言うが

「ダメだ!!」

と、シイを止めるテクス。

「行かせてください!!」

左手だつて、とつくに治っています!!」

と言うシイに

「そうはいかん!!」

それ以前に、君が着る装甲服は無い!!」

と言うテクス。

「どういうことですか?」

と訊くシイに

「君が着ていた装甲服だが、現在、修繕中だ。」

どこで見つけたのかは知らんが、動いているだけでも奇跡だったんだよ。」

と言うテクス。

「心配しなくてもいい。」

ランという、一番頼りになるヤツが戻ってきたんだ。」

と、シイをベッドに寝かせるテクスー。

◇

黒色機動群の新型機と交戦しているガンダムエアマスターだった
が…

「オラオラアッ!!」

と両手に持つバスターライフルを撃つガンダムエアマスター。

ところが…

「何…ッ!?!」

ガンダムエアマスターの攻撃は、全て弾かれてしまったのだ…!!

「ち…ちくしょう…ッ!!」

と、ガンダムエアマスターはバスターライフルを乱射するが、黒色機動群の新型機には、まったく通用しない…。

「なら、頭だッ!!」

と、黒色機動群の新型機の頭部を狙うガンダムエアマスター。
黒色機動群の機動兵器は、頭部もしくは腹部を破壊しなければ撃破
できない。

しかし…

「何でだよ…ッ!?!」

ガンダムエアマスターの攻撃は、まったく効かなかった…。

《コイツら、ヤバすぎるッ!!》

私の攻撃が、全然効かないッ!!

とフリーデンのブリッジに、ガンダムエアマスターからの通信が入
る。

「どういうこと…!?!」

と訝しむアミール。

「どうやら、そうとうな強化が施されているみたいですよ。」

と、やけに冷静な声で言うレイナ。

そんなレイナに、アミールは感心とも呆れともとれる顔をする…。

とにかく、この、レイナという女性は、危機的な状況にあっても慌
てたり、うろたえたり、取り乱したりすることがない。
年長者の余裕おとなというものだろうか？

「セイビさん。」

レイナです。

マイクロウェーブ照射装置

の稼働状況はどうですか？」

と、セイビに訊くレイナ。

《いつでも使えるが

照射時間までは保証できねえ

なあ…。》

と答えるセイビ。

「かまいません。」

サテライトキャノン撃てるだけのエネルギーがあるのなら、今すぐ起動してください。

スーさんがピンチなんです。」

と言うレイナ。

《わかった!!》

と答えるセイビ。

「ラン、聞こえて?」

今からマイクロウェーブを照射するわ!!」

と言うアミール。

《待ってましたあ☆》

と喜ぶガンダムエックス。

◇

フリーデンの上空に到着するガンダムエックス。

「サテライトシステム、起動!!」

とランが叫ぶと、背中にL字型に折り畳まれているリフレクターがX字型に展開され、機体の右に移動する。

そして、リフレクターの中央に装備されているキャノン砲が前方に展開される。

一方、フリーデンの右舷前方に、大きなパラボラアンテナのような物がせり出してきた。

その、パラボラアンテナの中央から、緑色のガイドレーザーが発射された。

フリーデンから発射されたガイドレーザーが、ガンダムエックスの胸部中央にある、緑色のガイドレーザー受信機に当たる。

そして—

フリーデンのパラボラアンテナから、マイクロウェーブが照射された—!!

照射されたマイクロウェーブを、ガンダムエックスの背中のリフレクターが受信し、サテライトエネルギーに変換していく…

…が…

マイクロウェーブの照射時間は、わずか4秒だった…。

「あ……？」

と、蓄積されたサテライトエネルギーの量を確認するラン。

(あ……)

通常出力で9発分……?)

敵は12体

いるのだが……。

(仕方がない……)

一部は、ビームソードにまわそう……。

と、エネルギーの配分を変えるラン。

その結果……

(通常出力で8発分……)

仕方ないな……★

それよりも、早くしないとスーが……!!)

と、ガンダムエックスはガンダムエアマスターの救援に向かった
|。

黒色機動群の新型機からの攻撃を回避し続けるガンダムエアマス
ター。

「何モタモタしてんだッ!!」

ランッ!!

早く来いッ!!」

と叫ぶスー。

すると……

上空から、青白い光弾が飛んできて……

黒色機動群の新型機の胸を撃ち抜いた——!!

爆発する、胸を撃ち抜かれた黒色機動群の新型機。

《お待たせえ☆》

と言ってくるガンダムエックスに

「遅いんだよッ!!」

と怒鳴るガンダムエアマスター。

《それでも、全速力で来たんだよッ☆》

と、サテライトキャノンを撃つガンダムエックス。
サテライトキャノンから放たれた青白い光弾が、黒色機動群の新型機の頭部を粉碎した。

(なんてこった…。)

あれくらいの威力がないと、アイツらを倒せないのかよ…。)

と嘆くスー。

その時

〈スー、戻ってこい!!〉

と、セイビからの通信が入った。

「オツサン？」

何でだよ?」

と訊くスー。

〈サテライトキャノンのエネルギーが少なすぎて、敵を全て倒すのはムリじゃ!!

それと、お前さんの銃が効いておらんと聞いてな。

ウイングガンダムセラフィムのバスターライフル

なら、あやつらを倒せるじやろう。〉

と言うセイビ。

「マジか!?

わかったツ☆

ラン!!

ここはまかせるぞツ☆

と、フリーデンに戻るガンダムエアマスター。

「3つ目ツ☆」

と、サテライトキャノンを撃つガンダムエックス。

だが…

サテライトキャノンから放たれた青白い光弾は、黒色機動群の新型機の右足に当たってしまった。

「やべツ★

はずした…★」

と、もう一度、サテライトキャノンを撃つガンダムエックス。
今度は確実に、右足を失った黒色機動群の新型機の胴体に当たった。

1発ムダにしてしまったため、倒せる敵は、あと4体…。
もちろん、はずさないことが絶対条件だ…。

「この…ツ★」

と、サテライトキャノンを撃つガンダムエックス。
ところが…

「えええ…ツ!?!」

今度は、かわされてしまった…。

「ええ…いッ★」

こうなったら、全部撃てツ★」

と、残りの3発を撃つガンダムエックス。

1発は、黒色機動群の新型機の左腕に当たり…

1発は、黒色機動群の新型機の胴体に当たり…

1発は大ハズレ…。

残り3発撃って、倒せたのは1体だけだった…。

サテライトキャノンを8発撃って、倒せたのは4体だった…。

サテライトキャノンを戻し、リフレクターも畳まれた。

そして、大型ビームソードを抜くガンダムエックス。

通常はライムグリーンのビーム刀身だが、サテライトエネルギーを使用しているため、青白いビーム刀身となっている。

「てえ…いッ!!」

と、ガンダムエックスは黒色機動群の新型機に斬りかかっていた。

決着の時（前）

フリーデンの発進デッキに戻ってきたガンダムエアマスター―。

「オツサンツ!!」

急いでくれツ!!

ランが1人で戦っているんだツ!!」

と叫ぶガンダムエアマスター。

「ほれ。

それを持って行け★」

と、台車の上に載っているウイングガンダムセラフィムのバスターライフルを指差すセイビ。

「おお…☆」

と、ウイングガンダムセラフィムのバスターライフルを持つガンダムエアマスター。

その大きさは、ガンダムエアマスターの身長に匹敵するほどの長さがあった。

「それなら、黒色機動群の新型機をも倒せるじやろう。

ほら、急がんと!!」

ランが危ないんじゃない?」

と言うセイビ。

「おうよ☆

んじや、行つてくらあ☆」

と、再び発進するガンダムエアマスター―。

◇

「やあツ!!」

と、大型ビームソードで黒色機動群の新型機の右足を斬り裂くガンダムエックス。

右足を失い、上手い具合に仰向けに倒れた黒色機動群の新型機の腹部に、大型ビームソードを突き刺すガンダムエックス。

ガンダムエックスが離れると、腹部を刺された黒色機動群の新型機は爆発した。

次の機体に斬りかかろうとしたが…

「うわあッ!!」

離せえッ!!」

捕らえられてしまった。

ガンダムエックスを捕えた機体と、もう1機が残り、あとの5機はフリーデンに向かっていった。

「やめろおッ!!」

そっちに行くなあッ!!

ティファアアアッ!!」

と叫ぶガンダムエックスに、黒色機動群の新型機が、モノアイから放つ青い光線をガンダムエックスに当てた。

「うわあッ!?!」

何をするんだッ!?!」

しかし、青い光線を浴びても、痛みも無ければ、熱さも無かった。そして、光線を放った機体が、降下カプセルの方に向かっていった。

一方…

ガンダムエックスを捕らえている機体は…

モノアイを赤く輝かせ…

ガンダムエックスを捕らえている腕に力を入れていく…!!

「うがああああ…ッ!?!」

と、悲鳴をあげるガンダムエックス…。

だが!!

左の方から飛んできた黄色い大出力ビームが、黒色機動群の新型機の頭を撃ち抜いた—!!

◇

フリーデンのブリッジでは—

「黒色機動群の新型機が、こちらに向かってきます!!」

と叫ぶオペレーター。

モニターを見れば、黒色機動群の新型機5機が接近してくる映像が映されている。

「主砲発射用意!!」

と叫ぶアミール。

「無理です。」

本艦の主砲は通じません。」

と、このような状況でも、冷静に言うレイナ。

「何もしないよりかはマシでしょ!？」

と怒鳴るアミールに

「本艦の主砲よりも、もっと頼りになる者がいます。」

と微笑むレイナ。

(あっ…!?)

とアミールがモニターを見れば…

ウイングガンダムセラフィムのバスターライフルを持ったガンダムエアマスターの姿が映されていた。

◇

ウイングガンダムセラフィムのバスターライフルを持って空を飛ぶガンダムエアマスター。

レーダーが、前方から迫りくる黒色機動群の新型機を捉えた。

「こつから先は通行止めだッ!!」

と、ウイングガンダムセラフィムのバスターライフルを撃つガンダムエアマスター。

ウイングガンダムセラフィムのバスターライフルから放たれた黄色い大出力ビームは、見事、先頭を進む黒色機動群の新型機の腹部を撃ち抜いたー!!

爆発する、黒色機動群の新型機。

「やったアアアッ!!」

とガッツポーズをするガンダムエアマスター。

ガンダムエアマスターに向けて、ビームライフルを乱射する、黒色機動群の新型機。

「あたるかよッ☆」

と、黒色機動群の新型機からの攻撃を回避するガンダムエアマスタ―。

そして―

「おらアツ!!」

と、バスターライフルを撃つガンダムエアマスタ―。

バスターライフルから放たれた黄色い大出力ビームが、黒色機動群の新型機の左足に命中した。

左足を失い、転倒する黒色機動群の新型機。

倒れた機体にかまわず、バスターライフルを撃つガンダムエアマスタ―。

今度は頭に命中した。

頭を撃たれた黒色機動群の新型機は爆発した。

残った2機が、ビームライフルを乱射する。

「へたな鉄砲は、数撃つても当たらねえんだよツ☆」

と、黒色機動群の新型機からの攻撃を回避しながら、バスターライフルを撃つガンダムエアマスタ―。

今度は腹部に命中し、爆散させた。

もう1機も、頭部に命中し、爆散させた。

そして、ガンダムエックスの援護に向かう途中で、左足を失って倒れている黒色機動群の新型機の腹部にバスターライフルを撃って、とどめをさした―。

ガンダムエックスの援護に向かう途中で、モニターを見ると…

(やべエツ!!)

なんと、ガンダムエックスが黒色機動群の新型機に捕らえられていた―!!

「その手を離しやがれツ!!」

と、バスターライフルを撃つ。

バスターライフルから放たれた黄色い大出力ビームが、黒色機動群の新型機の頭部に向かって伸びていく。

そして…

バスターライフルから放たれた黄色い大出力ビームは、ガンダムエックスを捕らえている黒色機動群の新型機の頭部に命中したー!!

《ありがとう、スー☆

助かったよ☆》

と、スーに礼を述べるラン。

「コイツは『貸し』だぜ★」

と、笑うスー。

《それよりも、逃げたヤツを追いかけてよう!!》

と言うラン。

「何ッ!？」

追うぞッ!!」

と、逃げた黒色機動群の新型機を追うガンダムエアマスターとガンダムエックス。

しかし…

「あっ!!」

と、空を見上げるガンダムエアマスターとガンダムエックス。

黒色機動群の 대기圏突入カプセルが発進したのだ。

《あれって、飛べるの?》

と訊いてくるランに

「みたいだな…。」

と答えるスー。

宇宙に向かって上昇していくカプセルを、ガンダムエアマスターとガンダムエックスはただ、見送ることしかできなかった…。

◇

ガンダムレオパルドとガンダムデリンジャーアームズの戦いも、決着の時が来たー。

ガンダムレオパルドも、ガンダムデリンジャーアームズも、銃砲撃戦タイプの装甲服だ。

おたがいに、激しい銃撃戦を展開し、弾切れになるまでミサイルを

撃ちあつた。

しかし、おたがいに防御力が高いために、勝敗に結びつくような決定打が出なかった。

「強いね、アム…★」

と、正面にいるガンダムデリンジャーアームズに通信を入れるガンダムレオパルド。

〈貴女もね、ロア。〉

と答えるガンダムデリンジャーアームズ。

「じつはね…」

私達のボスから、アムを生け捕りにしろと言われててね…。」
と言うガンダムレオパルド。

〈何、それ?〉

と、鼻で笑うガンダムデリンジャーアームズ。

「アムの装甲服が欲しいんだって…★

最悪…

アムを殺すことになつても、装甲服は無傷で手に入れろつてこと

★

と言うガンダムレオパルド。

「私の身ぐるみを剥こうと…?」

やれるものなら、やってみなさい!!」

と、右手に持つダブルガトリングガン撃つガンダムデリンジャーアームズ。

しかし…

すぐに発射音と、撃つた時の反動が消えた。

(弾切れ…!?)

と驚くガンダムデリンジャーアームズ。

(!?)

正面を見れば、ガンダムレオパルドが左腕のインナーアームガトリングを向けていた―。

決着の時（後）

しかし、どういうわけか、撃ってこない…。

「どうした!？」

なぜ撃たない!？」

と叫ぶガンダムデリンジャーアームズに

「撃ちたいけど…」

弾切れついでにエネルギー切れ…。」

とガンダムレオパルドは言って、左腕のインナーアームガトリングをバックパックに収容する。

「そう…」

それは残念ね!!」

とガンダムデリンジャーアームズは腰のフロントアーマーからマイクロミサイルを発射した—!!

マイクロミサイルの直撃により、爆炎につつまれるガンダムレオパルド…。

「切り札というのは、最後まで取っておくもの」

と言ったところで

「うっ!？」

と、腹部に激痛を感じるガンダムデリンジャーアームズ。

（何だ…?）

と、腹部を見てみたら…

（!!）

腹部にビームナイフが刺さっていたのだ—!!

「…これは…!？」

と、爆煙につつまれているガンダムレオパルドを見るガンダムデリンジャーアームズ。

「アムの言う通り…」

切り札は最後まで取っておくもの

だよ…。」

と、爆煙が晴れると、そこには無傷のガンダムレオパルドがいた。
「アムがミサイルを撃った時…」

私は
ビームナイフを投げた
のよ…。」

と言うガンダムレオパルド。

そして、仰向けに倒れるガンダムデリンジャーアームズ…。

倒れたガンダムデリンジャーアームズに歩み寄るガンダムレオパルド。

「やっぱり…」

人工MS娘^{まがいの}じゃ、本物のMS娘には勝てないか…。」

と言うガンダムデリンジャーアームズに

「そんなことはないよ。」

人造サファイア^{ロエ}って知ってる？」

と言うガンダムレオパルド。

「何の話？」

と訊くガンダムデリンジャーアームズに

「人造サファイア^{ロエ}って、専門家でも本物と見分けがつかない人造サファイアは、本物のサファイアよりも、ほんのわずかに輝きが鈍い。しかし、その差を見極めるのは、極めて困難。」

んだって…。」

と言うガンダムレオパルド。

ロアは、MS娘と人工MS娘の能力差を、サファイアと人造サファイアにたとえたようだ。

「悪いけど…」

私…

サファイア…

あんまり好きじゃない…。」

と言いついて、ガンダムデリンジャーアームズは息絶えた…。

ガンダムレオパルドは、ガンダムデリンジャーアームズの腹部に刺さったビームナイフを抜くと、彼女の遺体を担いだ。

「デイ、撤退だ!!」

とジエニスに通信を入れ、ガンダムレオパルドは撤退した…。

◇

ガンダムエックス

ガンダムエアマスター

ガンダムレオパルド

ジエニス

がフリーデンに帰艦した―。

ブリッジでは

「東部および西部より、多数の機影を確認!!」

と、オペレーターが叫んだ。

「おそらく、ガスタールとノーザンベルからの援軍ですね。」

と、相変わらず冷静な声で言うレイナ。

「撤退する!!」

ジャミングジエネレーター起動!!」

と命じるアミール。

一種のステルス機能であるジャミングジエネレーターを起動させ、フリーデンは夜の闇の中、北に向かって走っていった―。

◇

翌朝―

撤退に成功したフリーデンは、とある荒野に停泊していた―。

朝日が照りつける中…

ガンダムデリンジャーアームズの人工MS娘であったアムの葬儀が行われた…。

テクスが祈りの口上を述べる中…

アムは丁重に埋葬された…。

◇

アムの葬儀が終わると、アミールとレイナがアッセンブルームに
来た。

「これが、シン・クロサキが私達のために遺した
ウイングガンダムセラフイム

と

ガンダムデリンジャーアームズ…。」

と、修繕されたウイングガンダムセラフイムとガンダムデリン
ジャーアームズの装甲服を、感慨深げに見るアミール。

「ああ。

ガンダムデリンジャーアームズの方は、連合地球軍の方で修繕され
ていたが、ウイングガンダムセラフイムの修繕は楽じゃなかったぞ。

何せ、動いているのが不思議な状態だったからな。」

と言うセイビ。

「シイとデイには、ウイングガンダムセラフイムを見つけてくれたこ
とに感謝するわ。

じつはね、私達がエスタルドに来たのは、M・G・F. を攻撃す
るのもあったけど、本来の目的は、ウイングガンダムセラフイムを探
しにきたのよ。」

と言うアミール。

シイもエスタルド軍の状況や、シン・クロサキ兵団との戦闘、ウイ
ングガンダムセラフイムを手に入れるまでの経緯とを話した。

「じつを言うとなね…

私達も人材不足で…

とくにMS娘が足りないわ。

そこで、シイとデイには、ウイングガンダムセラフイムとガンダム
デリンジャーアームズの装着者になってほしいの。」

と言うアミール。

連合地球軍と戦う理由があるシイとデイに、断る理由は無かった
。

◇

艦長室に戻ったアミールは、レイナと今後について話し合う。

その中で…

「昨夜の戦闘中に、ランは黒色機動群の謎の光線を浴びせられたよう

です。」

と報告するレイナ。

「それによる、ランの異常は？」

と訊くアミールに

「テクス先生によると、ランの身体に今のところ、異常は見られないそうです。」

しかし、気になるのは、ランに光線を浴びせた黒色機動群の、その後の行動です。

ランに光線を浴びせた黒色機動群の機体は、その後、降下カプセルに乗って、宇宙に戻っていったようです。

このような行動は、これまで確認されていない事例です。」

と言うレイナ。

「それは…」

ランに何をしたの…?」

と訊くアミールに

「私の憶測にすぎませんが…」

おそらく、ランの何らかのデータを採取したのかと…。」

と答えるレイナ。

「それは…」

ランのデータが必要だったってこと？」

と訊くアミールに

「ランのデータが必要だったのか…」

あるいは、偶然選ばれたのか…」

私にも、皆目見当が付きません。」

と答えるレイナ。

「これからは、連合地球軍だけでなく、黒色機動群にも気をつけないといけないわね…。」

と、アミールはつぶやいた…。



アメリカ・ニューヨークにある連合地球軍総司令部では―。

「第13特別機甲師団は、アミットフォース討伐の任務に当たれ。」
と、連合地球軍の高官が、M・G・F。 第13特別機甲師団の師団長のブレックス少将に下令していた。

第13特別機甲師団は、陸上戦艦9隻からなる、M・G・F。でもシン・クロサキ兵団に匹敵するほどの精強部隊として知られている。

「了解。

我々、第13特別機甲師団はアミットフォース討伐の任務に当たります。」

と復唱し、敬礼するブレックスー。

第13特別機甲師団の旗艦テンザン級陸上戦艦アイリツシユに戻ってきたブレックスは、ブリッジへとあがる。

ブリッジには、MS娘部隊の隊長のジーナ大尉

がいた。

「ご苦勞様です、司令。」

と敬礼するジーナ。

「うむ。

その娘達は？」

と、司令官席に座ったブレックスが、ジーナの後ろにいる3人の少女に気付く。

「彼女達は作戦本部より、今回の作戦に同行させるように言われています。」

と言うジーナ。

「ボクは

ガンダムデスサイズギルティのキラライラスト：黒瀬夜明 リベイク」

と、ブレックスに敬礼するキララ。

「オレは

ガンダムサンドレオンのトウイラスト：黒瀬夜明　リベイク

だツ☆

よろしくなツ☆」

と、ブレックスに敬礼するトウ。

「ワタシは

テイエンロンガンダムのノウイラスト：黒瀬夜明　リベイク

といいます。」

と、ブレックスに敬礼するノウ。

「この3人はシン・クロサキ兵団の候補生なのですが、実戦経験が足りないのです、本作戦に同行させよと、作戦本部からの通達です。」

と言うジーナ。

「その件については、大尉に任せる。」

と言うブレックス。

「了解!!」

と敬礼するジーナ。

そして、ブレックスは艦内放送を始める。

「私は、第13特別機甲師団師団長のブレックスである。

当師団は、これより、アミットフォース討伐の任務に当たる。

総員、出撃準備にかかれ!!」

そして30分後―。

「全隊、出撃準備完了!!」

というオペレーターの報告を聞いたブレックスは

「第13特別機甲師団、出撃!!」

と叫んだ。

旗艦アイリツシユを先頭に

テンザン級陸上戦艦

ラーディツシユ

ピレネー級陸上戦艦

オマハ

ローリー

コンコード

トレントン

そして、補給艦として3隻のロッキー級陸上戦艦
で構成された第13特別機甲師団は出撃していった。